時間が巻き戻ったっぽいので今度は妹と仲良くしてみようと思う。

筆休め！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結城浩一郎は身の回りの人間が様々な事件に巻き込まれたのにも関わらず、自身は特に何事もなく平穏な一生を過ごした……はずだった。

「あれ、なんで生きてるの？　てか小さくなってね？」

理由は全く持って不明だが時間が巻き戻って人生をやり直せるようなので、とりあえず可愛い妹と仲良くなる事から始める事にした男が何やかんや色々勘違いされながら頑張るほのぼのストーリー。

※かなーりご都合主義、独自解釈、原作知識持ちを含む原作改変があります。苦手な方は読まない事をお勧めします。

※ハッピーエンド（）を目指しています。

※タグは必要に応じて増やすかもしれません。

※この作品は現実の世界の制度、法律等々とかけ離れた世界であると割り切って読んでいただいた方が楽しめるかと思います。ご了承下さい。

不定期更新になりそうですが、よろしくお願いします。

目　次

原因不明のタイムトラベル（精神のみ）に巻き込まれたんだが
1
兄は他人と話すのが上手い（妹談）――5
オベイロンに妹を寝取られそうな件について――8
妹の愛が重すぎて嬉しい（錯乱）――15
最近、義兄が僕に冷たいんだが――23
田舎は田舎で良いものだと思う。――35
魔王の嫁とエンカウントした時の対処法――44
あの子の夢はナイト様？――55
無知を恥じず、未知を恐れず――66

原因不明のタイムトラベル（精神のみ）に巻き込まれたんだが

結城浩一郎は度々既視感に襲われた。俗に言うデジャブである。
例えば家族旅行、例えば勉強、例えば厳しい教育の息抜きとして与えられていたテレビゲーム……体験する様々事が経験済みだと感じるのだ。
ここまで来れば既視感と言うよりも知識と言うべきではないだろうか。そのおかげで親が浩一郎に課す課題や習い事の対処に困る事はない。面倒だとは思うが、何でもこなす事ができた。そんな息子を両親は誇りに思っている様だった。それを当然の事と受け止める自分がいる……そんな浩一郎が自身が感じる既視感に決定的なものを感じたのは八歳の時。新しく妹が生まれ、彼女の名前が決まった時だった。

「明日奈……？」

初めて聞いた名前のはずだった。それなのに確実に聞き覚えがあった。間違えるはずもない。浩一郎は間違いなく、母親が幸せそうに抱いてる赤ん坊を知っていたのだ。その時に気付いた……と言うよりも、悟ったのだった。
「俺……あの頃に戻ってる、のか？」

△△△△△

「まさか、本当に？」
そうとしか考えられない。今の俺は確かに、結城浩一郎で。一度その人生を全うした……はずだった。

「生き返ってまさか……時間まで戻ってるなんて嘘だろ？」
物語やゲームじゃないんだから普通にあり得ないだろ常識的に考えて。だがこれはゲームではない。目の前で妹が、明日奈が元気に泣いているのは紛れもなく現実の出来事だ。
突然ブツブツと喋った俺に母さんが訝し気な表情を向けたので「何でもないよ。赤ちゃんって可愛いね」と返しておいた。確かに赤ちゃんは可愛い。成長したらもっと可愛くなる。これは確定事項だ。異論は認めん。
「ちょっとトイレ」
考え事をしたかったので母さんがいる病室を出て適当に座れる所を探した。
途中で慌てた様子の父さんとすれ違った。俺に一声かけてそのまま走って行った。恐らく仕事を抜け出して駆けつけてきたんだろう。しかし父さん、病院は走っては行けませんよ。気持ちは痛い程分かるので俺から注意はしない。遠くで看護婦さんに怒られている父さんの姿が何だか可笑しい。
可笑しいと同時に懐かしいとも思った。
ーー本当に巻き戻っているーー
そう結論付けた。これは確かに俺が一度経験した出来事だ。そしてこれからの人生において待ち受けているであろう未来も想像できた。
〝ＳＡＯ事件〟
一万人もの人間を電脳世界に閉じ込め、その半分近くの人間の命が奪われた人類史上屈指の大規模殺人事件。
そして俺の妹の明日奈が解決に関わっていた事件なのだ。
巻き込まれた明日奈はゲームクリアの攻略組と言われる集団の主力として活躍し、生きて帰ってきた人々から英雄と謳われている……と聞いた。
何故見た、ではなく聞いたのかと言えば、俺はＳＡＯというゲームに関わっていない。正確に言えば、ゲームソフト自体を購入したのは俺でそれを明日奈に貸してしまった為に彼女が巻き込まれてしまっ

た形だからだ。俺はその事実を出張先で聞いてソフトを貸した事を死ぬ程後悔した。

明日奈や他のゲームクリアに多大な貢献をした人間達はその後も度々起こったＶＲゲーム関連の事件の解決に大なり小なり貢献したそうだ。ちなみに俺はこういった事にも関わっていない。俺自身は本当に命の危機など最期に病気で倒れるまで感じたことも無いくらいに、平穏な毎日を過ごしていたのだ。今考えても妹やその旦那が死にかける冒険を何度も潜り抜けていたというのに……情けなさ過ぎて涙が出てくるぜ。

この話だって明日奈が結婚してその旦那と俺が一緒に飲んでいる時に酒の肴として彼から提供されるまで何も知らなかった。事件から十年以上経ってからの話だ。その理由は俺が明日奈と疎遠だったからに他ならない。

俺は今と同じ様に親から厳しい教育を受け、その期待に応えようと躍起になっていた。そんな俺が明日奈に対して必要以上に背伸びをして接してしまった。俺はお前より頑張っているんだぞ。優れているんだぞ、と。そんな事をしていたものだから明日奈が中学校に通い出す頃には必要以上の会話をしなくなっていた。年がかなり離れていた事も悪い方向に働いたらしい。険悪だったわけではないがとても仲良し兄妹とは言えなかった。

俺は歳をとってからその事を本気で後悔したりした。もう少しだけでも、幼い時から明日奈と仲良くしておくべきだったと。

「……いや、だからこそ。今回は」

心に決めた。理由は全くもって不明だが、折角時を遡ったのだ。今回は明日奈と今から仲良くしよう。忙しい親に代わって世話を焼こう。滅茶苦茶に可愛がってやろう。

シスコンだって？　上等さ。あんなに可愛くなる事を知っているんだ。こればかりは仕方がないね。

とりあえず混乱から回復した俺は、両親と妹がいる病室に戻った。速攻で妹を滅茶苦茶可愛がった。これが俺の妹か……明日奈ちゃんマジ天使。

その後調子に乗っていたら明日奈に泣かれてしまって母さんに滅茶苦茶怒られた。久しぶりの母さんの説教は余りに恐ろしく感じた。

でも何故だかそれは、俺の心に染みた。

兄は他人と話すのが上手い（妹談）

逆行した事を自覚した俺はとりあえずだが自分の今後の方針を決める事にした。

考えたのが未来を知った事で俺がＳＡＯ事件の発生を未然に阻止できるか、という事である……が、結論から言って事件を未然に防ぐのは困難極まりないだろうと思う。

何故なら俺はＳＡＯをデスゲーム化した張本人にしてナーヴギアを始めとしたＶＲ技術の生みの親である茅場晶彦と関わりが薄いからだ。仕事と家柄のおかげで挨拶して顔を合わせた事はあったが、それだけ。とても親しかったとは言えないわけで。茅場に働きかけて説得するといった手段を取るのは難しいと言う他ない。

かと言って茅場を亡き者にして阻止するというのもナシだ。彼はまだ何もしていないし、今時点でどこで何をしているのか知らない。ついでに俺は当たり前だが殺人などしたくない。

それにＳＡＯはゲームとして発表されなければ妹が旦那となる男と出会う事が出来ないだろう。

俺には未来の明日奈の幸せを奪うなんで出来ない。かと言って起こるであろう大量殺人事件を何もせず見過ごす事も出来そうにない。どちらを選ぶかなんて無理だ。どうやら俺は自分で思っていた以上に小心者だったようだ。

明日奈は変わった。仮想世界を通じて沢山の友人や恋人を得て強くなった。俺なんかと比べ物にならない程に。物語のメインヒロインに相応しい程に心も強くなった。

「俺がやれる事って言ったら……やっぱり茅場晶彦に近づく、とか？」

茅場晶彦に語りかけてデスゲーム化を阻止した上でＳＡＯを発表させる……これしかない。

だが、どうすれば茅場に近づく事ができるのか。一番てっとり早いのは俺も将来茅場と同じ〝アーガス〟に就職する事。しかし、理系の知識に乏しい俺がアーガスに入った所で営業職しかないだろう。そうなれば茅場と関われる機会は少なくなる。

一応、一流大学だったとは言え文系に重きを置いていた俺じゃとてもアーガスやレクトの技術職に就職になんて……待てよ。思い出せ、茅場晶彦の出身大学はどこだった？

「確か、東都工業大学だったか……？」

日本でも有数の難関校。しかも理系の大学。前回の俺が勉強した知識では役に立たない。しかし、これしかない。

幸いにも俺と茅場の年の差は確か二、三歳だったはずだ。上手くいけば大学時代でそれなりに茅場と親しくなれるかもしれない。同じゼミや部活に入るとかできれば不可能ではないだろう。

「お兄ちゃん？」

声を聞いて考え事を中止する。座っていた椅子を回して振り返ればいつの間にか俺の部屋の入り口辺りに明日奈が立っていた。

「あのね。呼んだよ？　ドア叩いたよ？」

「ああ、そっか。気づかなくてごめんな」

考え事に没頭し過ぎて妹の声が聞こえていなかったようだ。無視されていたと思ったらしく彼女はあからさまに不機嫌そうだ。そんなに頬を膨らませなくても良いじゃないか、と思わず苦笑する。

何とか不貞腐れているお姫様のご機嫌を取ろうと手招きする。ちょこちょこと可愛らしく駆け寄って来た明日奈を優しく抱き上げてやる。お、また少し重くなったかな。子供の成長は早いものだ。今の俺も子供ではあるのだが、そう思わざるを得ない。

俺の膝の上に乗せてやると明日奈は何が嬉しいのか、ご機嫌になって足をパタパタと動かしている。

「それで、何か用があったんだろ？」

「うん。またお話聞かせて欲しいって思って」

「またか？」

このように明日奈は度々俺にねだってくる。少し前から彼女との暇潰しの為に俺が知っていた物語を芝居の様に聞かせてやっていた。

世界的に有名な神話であるとか、いつかやったゲームの話だとか。如何にも俺が考えたかのように話すものだから明日奈も最初は俺のオリジナルのストーリーだと思っていたらしい。文才のない俺だが

話し方は中々様になっていると自覚している。幼稚園の先生になって読み聞かせでもしてやってる気分である。
　これが上手くいったらしく好奇心旺盛な年頃の明日奈は俺の話を大層お気に召した様でこのように俺の部屋に押しかけて来る事もしばしばなのだった。
「……だめ？」
「ダメじゃないさ」
　妹に見上げながらおねだりされて断れる兄がいるだろうか。いや、いないだろう。前回は疎遠だったからこそ今年で三歳になった明日奈が可愛くて仕方がない。
「今日は何のお話をしてくれるの？」
「そうだなぁ……」
　前回は丁度区切りよく話が終わったんだったよな。それなら何の話をしてやろうかと少しだけ考えてから、
「……じゃあ、今日はあれだな。剣と戦いでできた、鋼鉄の城の冒険でも話そうかな」
　いつか君の力になると信じて、俺は和人君から聞いたこの話を送ろうと思う。
　これはとっておきのお話なんだーーそう前置きしてから俺は語り出した。

オベイロンに妹を寝取られそうな件について

俺が通う事になった高校は前回の……逆行する前と同じ高校だった。都内で有数の進学校だし、倍率もかなりのものだったが勉強はしっかりとしていたので入学試験も無事に突破した。

しかし、将来東都工業大学に通う為に前回と同じ文系ではなく理系のコースを選んだ。これが本当にキツかった。自分で選んだ道なので文句は言えないがキツイ。何がキツイって教室の空気がキツイ。授業は普通に生活する上で全く耳にしない言葉が飛び交い、休み時間でも余計な会話などなく自習している者が殆どだった。

そこまで追い込んで勉強しない方が結果的に上手くいく事が多いぞー。人生の先輩としてそうアドバイスの一つでもくれてやりたいところだが、彼らはどれだけ勉強しても全く足りないと思っている。一つの事に熱中するのが青春と言えば聞こえは良いが、貴重な高校生活を勉強だけで終わらせてしまうのは勿体無い気がする。

そんな味気ない勉強ばかりの高校生活を送っていると、テレビのニュースで俺の目的の人物を見かけた。言わずもがな茅場晶彦である。

……高校生でゲーム開発やらで成功を収めて年収数億？　しかも卒業したら〝アーガス〟の開発部長のポストが与えられるのが決まってる？　そのまま東都工業大学にストレート入学する？　冷静にとんでもないスペックだ。俺なんかが今から必死に勉強した所で奴に追いつけるのだろうか……そんな不安は頭を振って吹き飛ばす。

やると決めたのは俺であって、ついでにやってみなければ分からない。何事にもポジティブに考えた方が良いに決まっている。ＳＡＯ事件を阻止する。明日奈も無事に和人君とゴールイン。その為ならどんな苦難にだって耐えてみせるさ。

そうポジティブにーーそんな事を考えていた矢先の家族会議だ。

「明日奈に婚約者ができる」

「ふぁっ!?」

久しぶりに父が早い時間に帰って来たと思ったらこれだ。そう言

えばこのくらいの時期だったかと思い出す。
変な声を上げてしまったので俺以外の三人がキョトンとしている。俺は空気を変える意味も兼ねて咳払いをした。
そう、明日奈には小学校二年生の時に婚約者ができるのだ。それも年上の男だ。父の腹心の部下の息子である彼は須郷伸之といった。
父や須郷の親は明日奈との婚約を利用して、将来〝レクト〟の経営を須郷に任せる腹積りなのだが、
「妖精王オベイロンとその妃ティターニアか……良くもまぁ思い付いたもんだ」
彼は未来にて明日奈を利用してレクトを乗っ取り、技術もろとも売り飛ばそうとした悪党だ。父はもちろん俺も彼の表面に騙されその企みに全く気づく事ができず、結果として和人君とその友人達の手によって明日奈とレクトは救われたわけだ。和人君マジ最強でしょ。
そんなヒーローの様な活躍をした和人君を見てしまった俺から言わせてもらえば、あれ以上の男でなければ明日奈は渡せない。そして須郷がその器であるかと問われれば否と答えざるを得ない。しかしこれじゃ明日奈の兄貴と言うよりも父親になった気持ちだな。
「問題は茅場だけじゃなくて須郷もだったな……すっかり忘れてた」
「お兄ちゃんさっきから何ブツブツ言ってるの？」
「ちょっと考え事をな……っと、そこの計算間違ってるぞ」
「あ、ほんとだ」
間違いを指摘すると計算式を丁寧に消しゴムで消している明日奈はまだ小学校二年目の七歳。まだ婚約者の意味も正しく理解できていないだろう。将来の旦那さんができると聞いてもそれほど動揺していなかったしな。
「学校楽しいか？」
「うーん、まだよく分かんない。クラスも変わっちゃったし」
そっか、と短く返して再び思考する。
考えてみたら須郷の方が何とかしやすそうだった。思い出せば婚約が決まってからそれなりの頻度でウチに顔を出していたし、一緒に食事をした事もある。茅場よりも関わりやすそうというだけでハー

ドルは低いように感じた。
まさかこの時からレクトを乗っ取って売り払おうだなんて考えていないだろう……いないよな？　和人君や明日奈の話を聞く限り相当な狂人だったそうだから考えていてもおかしくないのか？
「須郷さんに会うの、楽しみだな」
「え、私はあんまりかなー」
そうなのか？　と聞けば「婚約者って将来結婚する人の事でしょ？　私はお兄ちゃんと結婚するんだもん」と笑顔で答えた明日奈。皆さん俺の妹はこんなにも可愛いです。例え成長して兄離れする事になったとしてもこの時の思い出があれば俺は頑張れるよ。そう思ったワンシーンでした。
にぱー、と笑う明日奈に『兄妹で結婚はできないんだよ』と今この場でとてもじゃないが言えずに苦笑いしながら頭を撫でてやることしかできなかった。

△△△△

親に決められて自分の将来は既に決まっていた。親の手で敷かれたレールの上を歩くだけの人生。その最たるものが勝手に決められた婚約者だろう。
今時、政略結婚なんて時代錯誤も良いところだと悪態を吐いたとして聞き入れてくれる者などいるはずもなく。自分でも仕方がない事だと半ば諦めていた。
高校生の須郷伸之の婚約者は小学二年生の少女。恋愛感情を向けるなどできるはずもない。しかし喜んで見せなければ親に白い目で見られる。白い目で見たいのはこちらの方だというのに……そう内心で溜息を吐いていた。
その為、婚約の挨拶を兼ねた食事会の為に婚約者の家を訪れるのは気が重くて仕方がなかった。一回り近く歳の離れた少女とどう接す

れば良いのか。今の須郷には答えを出せそうにもない。
答えは出ないままに婚約者の実家である結城家に訪れる日がやって来た。
到着した家はかなり立派だった。とても四人家族とは思えないくらいに広い。豪邸と言っても過言ではない。自分も将来、彼女の父から会社を引き継いだらこんな家に住むのだろうかーーそう思うと悪くない縁談なのかもしれないと思えた。
「いらっしゃい須郷君」
家に入って出迎えてくれたのは家主である結城彰三だ。人の良い笑顔で名前を呼ばれたのは須郷ではなく父親の方だ。
「伸之君もいらっしゃい。少し見ないうちに大きくなったね」
「お久しぶりです」
少しだけ身長が伸びましたから、と笑顔で返せば彰三は満足そうに頷いた。挨拶もそこそこに玄関を上がり部屋へと案内される。
大きめの客室には料理が並べられている大きめなテーブルがあり、既に彰三の家族が席に着いていた。
「お久しぶりです京子さん」
「久しぶりね。元気そうで何よりだわ」
素っ気ない態度だが京子はこういう人だと理解しているので特に不快になったりはしない。
「明日奈君も久しぶり」
「お久しぶりです」
許嫁となる明日奈はぺこりと頭を下げて挨拶できる辺り、しっかりと教育されているようだが言葉には刺々しさがあった。どうやら須郷は警戒されているらしい。この歳で仲良くもない男が結婚相手にされたのだ、無理もない。
そして最後の一人が明日奈の兄である男なのだが、
「久しぶり浩一郎君」
「お久しぶりです伸之さん。早速ですが貴方に明日奈をお任せする事はできませんので今日はお引き取り願えませんでしょうか」
「……は？」

義兄となるはずの男ーー結城浩一郎からの言葉が理解できずに須郷は思わず固まってしまった。
浩一郎の予想外の言葉に大人達は絶句、明日奈は特に気にも留めずにその場の様子を見守っているようにじっとしている。
しばらくそんな時間が続いたが、固まってしまった空気を砕いたのもやはり浩一郎だった。
「冗談ですよ。伸之さんも父さん達もそんな顔しないでください」
ジョークじゃないか、と下手人はへらっと笑う。須郷はようやく空気が動くのを感じた。
「浩一郎、伸之君に失礼だろう。冗談でも言って良い事と悪い事がある」
「ははは、僕の事なら大丈夫です。それに浩一郎君の気持ちもよく分かります。こんなに可愛い妹を他人に嫁がせるなんて彼からすれば気が気でないでしょう」
「浩一郎は昔から良く明日奈の面倒を見てくれていてね。ただ少しばかり、その……明日奈を甘やかし過ぎている節があって」
俗に言うシスコンという人種か。そう須郷は結論付けた。そうなれば浩一郎はこの縁談には断固反対の立場だろう。彼一人が反対した所で最早どうにもならない事なのは間違いないが。
「……お互い、思い通りにはいかないものだね」
「はい？」
漏れてしまった愚痴の様な呟き。ああ、どうして世の中とはこんなにも思い通りにはならないものなのか。須郷は嘆かずにはいられなかった。
ともあれ、今日は大事な食事会である。気を取り直すように彰三が開始の挨拶をして全員が料理に手を出し始める。
彰三と須郷の父は酒が進むと共に会話も盛り上がっていった。明日奈と京子は静かに料理を口に運び、浩一郎はそんな空気に気を遣ったのか時折、須郷に話題を振ったりしていた。
「伸之さんは高校二年なんでしたっけ？」
「ああ。そうだけどそれがどうかしたかい？」

「進学先とか考えてます？」
「今の所は東都工業大学を考えているよ。難関と言われる大学だけど、今の調子で勉強を続ければ合格も出来ると思う」
「はー…伸之さんは相変わらず頭が良いんですねぇ」
　うんうん、と感心する様に頷いている義弟（予定）だって勉強は得意だと聞いている。須郷とは専門とする分野は違うので一概には比べられないのだが、純粋な高校レベルの勉強で言えば須郷と浩一郎は遜色ない知識を持っているはずだ。
「浩一郎君、高校生活に慣れたかい？」
「はい。でも、クラスの連中が勉強勉強勉強って奴ばっかりで少しつまんないですね。自分で選んだ学校なので文句は言えないんですけど……一緒にゲームでもする友達が少ないのが今の悩みです」
「今は余裕がないだけさ。そのうち打ち解けてくればそういった友人もできる」
　自分で言っていて何という皮肉だと須郷は自嘲した。高校二年目になった自分にはそのような友人もいないと言うのに。最も作る気もさらさら無いのだが。
「ゲーム、か」
　最後にゲームと呼ばれる類の娯楽に触れたのは何時だったかと須郷が記憶を辿ろうとすると、浩一郎が提案してきた。
「そうだ。伸之さんはゲームとか好きですか？」
「え？」
「折角だから今からやりません？　どうせあの二人の話はまだ終わらないし、この後ヒマでしょう？」
　そんな提案に須郷はすぐに頷いてしまった。特に理由もなく、本当に何となく。気紛れで頷いてしまったのだ。
「おい浩一郎！　これから伸之君の事はお義兄さんと呼ぶんだぞ！」
　未だに会話と酒が止まらない彰三達からの戯言を二人は苦笑いで受け流し、ゲームをすべく浩一郎の部屋に向かった。

須郷は後に、この時の自分の気紛れが人生の分岐点だったと思い出す事になる。

妹の愛が重すぎて嬉しい（錯乱）

須郷家との食事会が無事に終わり、俺も須郷とある程度交流するという目的も果たせた。

須郷との久しぶりの再会の感想は、率直に言って相変わらず『良い人』だった。それに尽きる。

人の良さそうな笑顔を浮かべているし、物腰もあの歳にしては穏やかだ。今の俺とは比べ物にならない程に大人びているように感じた。将来の目的も明確で、親の言う事をしっかりと聞き、その期待にも見事応える……正しく理想の息子と言うに相応しかった。

しかし、あれでは不満も多いだろうと俺は思っていた。一緒にゲームをして話を進めているうちにそれを確信した。

加えてあの感じでは彼が狂っても不思議ではないとも思った。

自分がやりたい事も碌にできず、一緒に遊ぶ友人も少なく、加えて愚痴を聞いてくれる人間も周りには存在しない。あの若さで天才と呼ばれる頭脳を持っていながら、同じ分野の頂点には茅場晶彦が絶対的な存在として君臨し彼と比較される事も多い。それに加えて自分が好きでもない一回り近く歳の離れた明日奈を婚約者にされてしまうときたか。

明日奈は確かに可愛いし天使ではあるのだが、須郷が明日奈に恋愛感情を向けられるかはまた別問題なのだ。

須郷とゲームをしながら何度か愚痴の様なものを彼の口から聞く事ができた。これは前回の俺は当然だが経験しなかった出来事だ。多少は俺に対して心を開いてくれたのは須郷の凶行を阻止する上で最初の一歩と言えるだろう。

何より、また今度一緒にゲームをする約束までする事ができた。更に須郷と仲を深める口実を作る事ができて少しだけホッとした。

ホッとしたのだが……

「お兄ちゃん次はね、あのお店が見たい」

須郷と仲良くなる為に、明日奈を犠牲にしてしまった。それが不味かった。

まぁ、あれだ。犠牲にしたというのは流石に言い過ぎで単にあの食事会の日、須郷とゲームをしようとした時に明日奈も一緒にやりたいと言ってきたのだが、俺はそれを断ったのだ。

明日奈がいたら須郷から本音を聞く事はできないだろうと考えての苦渋の選択だった。しかし明日奈は自分だけ仲間外れにされたと感じてしまい、すっかり機嫌を悪くしてしまったというわけだ。

『お兄ちゃんは私より須郷さんの方が好きなんだ』

『そんな事ないぞ。明日奈が一番に決まってる』

『私の事仲間外れにしたのに？　ああ、きっと男の人同士の話し合いは楽しかったよね。女の子がいたら邪魔なんだもんねそうだもんね』

『……今度、二人でどっかに出かけるか』

『ほんと!?　私、色々欲しい物あったからお買い物に行きたいな♪』

『よし、行くなら今度の休みだな』

こんな感じのやり取りを経て、俺は明日奈のお買い物に付き合わされているというわけだ。正確に言えばもう少し修羅場っぽかったが大体あんな感じのやり取りだった。

今の俺は明日奈に腕を引かれる形なのだが、何だか周囲の視線が擽ったい。確かに高校生くらいの男と小学生くらいの女の子が仲良さそうにしているのを見たらほとんどの人間は仲の良い兄妹だと思うだろう。やましい気持ちなど全くなくても、前回の俺は明日奈とこんな風に歩いた事はないから少しだけ気恥ずかしい。

「まだ買うのか？　結構買ったけど」

「うん。最近身長伸びてきたから新しい服とか靴とか揃えなきゃいけなくて……あ！　これとか可愛いと思わない？」

水色のワンピースを手に取って俺に見せてくる明日奈に「可愛いよ」なんて適当とも言える返事をする。そうやって嬉しそうに笑ってるお前の方が可愛いよなんて思う俺はもう末期だろう。いつからこんなにシスコンを拗らせてしまったのだろうか。考えてみても分からない。

明日奈が選んだ衣服の会計を済ませて時計を見ると、そろそろ昼食に丁度良い時間になっていた。

「もうお昼になるけど何食べる？　食べたい物とかあるか？」
「うーん。特にないかなぁ」
「今日は明日奈の為にこうやって来たんだから少しくらい我儘言っても良いんだぞ」
「それじゃあね、私あれが食べたい」
明日奈が指差したのは洋食中心のメニューを揃えたファミレスだった。中に入ると店員さんに何も言わなくても禁煙席に案内される。二人共どう見ても未成年だもんな、当たり前だが。
メニュー表と睨めっこしながら何を食べるか考えている明日奈。俺は彼女がこんなに表情豊かだという事を知らなかった。
良く笑い、良く怒り、良く泣く。
そんな当たり前の事なのに俺は知らなかった。前回の時、妹は基本的に無表情だった。俺を含めた家族の前では感情を押し殺していたのだろう。周囲からの重圧から耐える為に。
「お兄ちゃん？」
明日奈の声で思考を中断する。いかんいかん、変に記憶があるせいで余計な事まで考えてしまいがちなのは悪い癖だ。
「決まったよ。このハンバーグのセットにする。お兄ちゃんは？」
「俺はこっちのナポリタンかな。デザートは良かったのか？」
「うーん、食べたいけどそんなに食べきれないと思うし……」
「だったら俺と半分ずつ食べようか。実は、このケーキ食べてみたーー」
「だったら私はチョコレートのパフェが食べたい！」
「……じゃあ、それで決定だな」
俺の意見が速攻で却下され、明日奈は備え付けの呼び出しボタンを押した。
やって来た店員さんに注文し、しばらくして料理が届けられ俺達は食べ始める。
向かいに座っている明日奈は美味しそうにハンバーグを頬張っている。あんな顔も、前回の俺は見た記憶が無かった。
確実に前回とは違った点が存在する。一番大きいのは須郷、明日奈

との関係。次は俺が高校で文系ではなく理系のコースを選んだ事か。
この様に未来は変えられる。知っているのだから違う道を選んで変えられるのは当然かもしれないが、
ーー未来とは、安易に変えてしまっても良いものなのだろうか？
俺が前回とは違う選択肢を取る事で何らかの不利益を生む可能性もあるはずだ。むしろその可能性は大いにあると言っても良い。それに対して不安が無いと言えば嘘になってしまう。
それでも、やるしかない。悲劇が起こるのを知っていて、それを止められるのは自分しかいないのだ。そんな小難しい事を考えるのは全てが終わってからで良い。
「伸之さんと仲良く出来そうか？」
「んー、無理かなぁ」
「な、なんでだ？　俺から見たら悪い人じゃなさそうだけど」
「良く分からないけど。きっとあれ、お母さんがたまに言ってる『生理的に無理』って奴だと思う」
「伸之さん……」
哀れ須郷。仮に未来が変わっても明日奈が彼のお嫁さんになる事は無さそうだ。
というか生理的に無理とまで言うか。小学生なのにえげつない事を仰られる……我が妹ながらその将来が末恐ろしい。パフェを食べたせいで明日奈の口の横についていたクリームをナプキンで拭ってやりながら、俺はそんな事を思った。

△△△△

結城明日奈にとって、浩一郎は特別な存在だった。
血の繋がった兄というだけでなく仕事の都合で家にいる事の少な

い両親に代わって自分の世話を焼いてくれていた。文字通り彼は明日奈の親代わりだったのである。

両親はーー特に母親である京子はーー明日奈に対して厳しかった。結城家の一員として恥ずかしくない人物であるようにと。兄も立派に頑張っているのだからお前もしっかりやれ、と。勉強やら習い事やらを幼い頃から強要された。

通っていた幼稚園にいる他の子達は自分の様に習い事や勉強を強要されている子は少なかった。いたにはいたが、明日奈と同程度のノルマがある子供などいなかったのだ。幼い明日奈は、どうして自分だけ、と不満に思ったものだ。

それでも親には文句など言わなかったし、言われた通りに課せられたノルマをこなした。両親が自分の為を思っての行動なのだと理解はしていたからだ。その為、親が求める結城家にふさわしい良い子でいられるように必死に努力した。

そんな年齢に不相応な生活を送る彼女の数少ない安らぎの時間が、兄と戯れる時間だった。

習い事と勉強のせいで同世代の子供と遊ぶ時間が中々取れなかった。その為、それらが終わった後に兄に遊んでもらったり物語を聞く時間が明日奈にとって子供らしくいられる時間だったのである。

浩一郎は遊んでくれるだけでなく、勉強も教えてくれていた。両親は当初、明日奈に専属の家庭教師を雇う予定だったのだが浩一郎が勉強を教えてやると言い出し、結果として明日奈の学力も向上したのでそのまま彼女の勉強を見る事に落ち着いたのだ。

彼は特別教えるのが上手という訳ではなかったが、明日奈のやる気を引き出す事に関して言えば彼以上の適役はいなかった。

伊達に生まれてからずっと面倒を見てくれていた訳ではないという事だろう。浩一郎は妹のやる気のツボの様なものを心得ていた。

ちなみに浩一郎は明日奈の、というより他人をやる気にさせたり乗せるのが上手い節があった。とても高校生とは思えない口達者だと父親は苦笑を混ぜてそう評していたくらいだ。

少々長くなってしまったが何が言いたいかと言えば結城明日奈は

お兄ちゃんっ子に育ってしまったのである。これは浩一郎が意図してそう育てた訳ではなく、目に入れても痛くない程に可愛がってきた言わば当然の結果である。

そんなブラコンの明日奈がとある休日に浩一郎の買い物に着いて行く。予定が合えばこうして兄と何処かに出かけるのも彼女の楽しみの一つだ。

ショッピングモールで昼食を終え、明日奈がトイレに行って戻って来た時、浩一郎は数人の少年少女達と談笑していた。明日奈が戻って来た事に気付いた彼は手招く。何となく嫌な空間だと感じたが兄に逆らうような事はせず素直に従って明日奈は駆け足で近寄った。

「この子が俺の妹の明日奈。ほら、挨拶して」

兄に促されて挨拶をして頭を下げた。途端に知らない人達に囲まれる。思わず身構えるが、

「この子が結城が溺愛してるって噂の明日奈ちゃんかー」

「うわー！　ちっちゃい！　可愛い！」

小学二年生の明日奈は言うほど小さくはない。しかし二人の女子高生に揉みくちゃにされているから普段より小さく見えるのは間違いなかった。

「結城君が溺愛してるのも分かるわ～」

「しっかし、あんまり結城に似てないな」

「俺に似てないからこんなに可愛いんだろ？」

ドヤ顔で言い放つ浩一郎に友人達は若干引いているようだ。その隙を突いて明日奈は、さっと女子高生の腕の中から抜け出して浩一郎の背後に隠れた。

「あー。逃げられちゃった」

「お前らが玩具みたいに撫で回したからだろ……明日奈ちゃんごめんねー？」

眼鏡を掛けた男子高校生が目線を合わせるようにしゃがんで言った。

「お前が明日奈の名前を呼ぶな変態」

「お前にだけは変態とか言われたくねーからこのシスコン野郎!!」

浩一郎はぎゃいぎゃいと楽しそうに友人とじゃれ合っている。
彼のそんな表情を明日奈は見た事がなかった。その瞬間に明日奈は、
ーー面白くないーー
「ん、どうしたんだ明日奈」
ぐいぐいと兄の腕を強く引っ張る。この場所から離れようと催促する。
ーー彼らから離れないと、兄を取られてしまうかもしれないーー
「おっと、皆ごめんな。そろそろ行くわ」
まさかそんな歪んだ感情で自身の腕を引いているとは夢にも思わない浩一郎は適当に挨拶をして友人達から離れた。
しばらく明日奈が浩一郎の腕を引っ張って歩いたところで、
「……どうした明日奈。何かあったのか？」
浩一郎は明日奈の機嫌が悪い事に気が付いた。しかし心当たりはないらしく首を傾げている。
「別に何でもないよ」
明日奈が拗ねている理由が分からず困惑する浩一郎。
明日奈は急かすようにどんどん進む。浩一郎の腕をぐいぐい引っ張って進む。
行き先など考えていない。ただあの居心地の悪い空間から離れたい。その一心で明日奈は歩いた。
「大丈夫だよ」
歩きながらそう言われた。その声色は、とにかく優しい。
「俺は明日奈を置いて何処かへ行ったりしないから」
前を向いているので明日奈から浩一郎の顔は見えない。
見えなくても彼が笑顔でそう言っているのだと分かった。
兄は両親や親戚からよく大人びていると評されているが、全くもってその通りだと思う。何と言うか、自分に対する言動が世間一般で言う父親の様に思えるのだ。（これを聞いたら実の父親である彰三は泣いてしまうかもしれないが）
加えて浩一郎は非常に優秀だ。父や母の付き合いで歳上の人間と

話す時も立派に受け答えする事ができるし、勉強面では通っている学校でもトップクラス、全国模試でも上位に入れる位には優秀だった。
対して自分はどうだろうか？
勉強面では同じ年齢であった時の結果にも歯が立たず、知らない大人と話す機会があっても上手く受け答えする事が出来ない。優秀な兄と不出来な妹が自然と比べられてしまうのも良くある事だった。
何より、先程の様に兄が知らない人と楽しそうにしているだけで嫌な気持ちになる。その優しい笑顔を自分にだけ向けていてほしいと思ってしまう……何と幼稚な事だろうか。
「おっと…」
湧き上がる何かを抑えられなくなり明日奈は浩一郎に抱き付いた。彼の腹の辺りに顔を埋めて自分の顔を見られない様にした。とてもじゃないがこんな醜い顔を大好きな兄に見せられなかった。
「全く、明日奈は何時まで経っても甘えん坊だな」
大きな手が明日奈の頭を撫でる。彼がこうやって優しく撫でてくれるのは大好きだったが、今だけはその優しさが少し辛かった。
いつかは俺から離れていくんだろうな、と小さく呟かれた言葉を胸に刻む。
この優しさに甘え続けていては何時まで経っても強くなれない。学力とか目に見えるものだけでなく、心も。
大きな人だからこそ、その背中を超えて行きたい。
大好きだからこそ負けたくない。
明日奈は密かに兄離れしようと決意を固め、それに比例するように腰に回していた腕の力が無意識のうちに強くなっていた。
「なあ明日奈」
「……なに？」
「今日久しぶりに一緒に寝るか」
「……うん」
一瞬だけ悩んだが明日奈はその提案を飲んだ。残念ながらまだまだ兄離れは遠そうである。

最近、義兄が僕に冷たいんだが

明日奈とお出かけしたあの日以降、凄い。

何が凄いのかと言えば、妹の勉強や習い事に取り組む時のやる気が凄いのだ。

提示された課題に対して全力で取り組む。ただ我武者羅にやる訳ではなくしっかりと効率の良さも考慮していると見受けられる。

そんな努力の結果として成績やら習い事の結果やらが凄い事になっている。最近の出来事で言えば習っている水泳の大会で優勝した。その余りの速さに応援に駆け付けた俺は驚いたものだった。それにしても文武両道とか君は本当に俺の妹なの？　君のお兄ちゃんはあんな人魚みたいに速く泳げないよ？

何かあったのか？　と聞いてみれば明日奈は、

「お兄ちゃんに負けたくないの」

ふん、と可愛らしく意気込んで言われてもね。君のお兄ちゃんはそんなに立派なもんじゃないでしょ？　俺は君の様に目にも止まらない速さで算盤弾くなんて芸当はできないよ？　実際に目の前で明日奈が算盤を弾いているのを見た時は目を疑った。質量のある残像ってああいうものか……指が分裂しているように見えたのは長い人生経験の中でも初めてだったぞ。

更に俺が気になっている事は、最近明日奈が冷たい気がする。以前の様に俺にぴったり着いて来る事も少なくなった。前まではどこに行くにもくっついて来ていたのに。

まさかこんなに早く兄離れが来るなんて。いつかは来ると思っていたが早すぎやしないかい？　お兄ちゃんは悲しくて泣いちゃいそうだ……はっ、まさか妹離れしなきゃいけないのは俺の方なのか？　兄離れして立派になろうとしている妹の姿を見るのは嬉しいと同時に寂しく感じた。

それでも偶に一緒に寝て欲しいとせがんでくる事もあるから完全に兄離れが始まったわけではないのだろう。しかしいつまで一緒に寝てやる事が出来る事やら。世間体的にそろそろ一緒のベッドに入

るのは止めないといけないだろうな、なんて考えていたりするわけである。

そんな感じで相も変わらず情けない事この上ない俺も高校二年生になって本格的に自身の進路を考える事になった。

以前から進学先にと決めていた東都工業大学。その入試対策は既に始めている。過去問を解いたり学校の先生に教えを乞うたりと我ながら意欲的に勉学に励んでいると思う。

途中、勉強内容が余りにも難解すぎて何度も挫折しそうになったのは内緒だ。きっとこれから先も何度も同じような状態に陥ってしまうだろうが、俺にはＳＡＯのデスゲーム化阻止してプレイするという目標があるのだ。こんな所で諦めるわけにはいかない。

え、いつの間に実際にプレイする事も目標になったのかって？　そりゃあ前回、苦労して買ったのに結局一度もプレイする事もなく処分されたゲームをやってみたいと思うのはゲーム好きとしては当然の心理だろう？

とにかく今は雌伏の時。ただ基礎的な知識と学力の向上に励み続けるだけだ。

「……だと言うのにノブさんときたら」

『どうした浩一郎君。まだ今回のミッションは達成していないけども』

「仮にも受験生なのに俺なんかとゲームしてて大丈夫なんですか？」

偶に息抜きは必要だろう？　と装着したヘッドフォンから義弟（仮）の声が聞こえてくる。二日に一回は俺をゲームに誘うのはペース的に偶にとは言わないんじゃないんですかねぇ？　この人と一緒にゲームやるのは意外と面白いからあまり文句は言えないけど。

「なぁノブさん」
『さっきからなんだい……って、いつの間にか囲まれているじゃないか！　一先ずここを切り抜けるのに手を貸してくれないかな？』
　俺の話は無視ですかそうですか。伸之さん改めノブさんとこうやってゲームをするようになったのは半年くらい前からだ。その時にやったのは俺の家にあった色々なキャラを操って文字通り大乱闘するゲームだった。
　それから俺の勧めで様々なゲームに手を出したノブさんが一番のめり込んだのはゾンビなどの怪物相手に武器を用いて立ち回るものだ。
「それでですね」
　コントローラーを操作し迫りくるゾンビをナイフで切り払いながら、ノブさんに質問する。
「第一志望はもう決まっているんですよね。やっぱり東都工業大学に？」
『ああ。今のところ模試の結果もＡ判定で合格圏内だしね』
　東都工業大学に現役Ａ判定とか頭良すぎィ！　俺と一緒にゲームに興じているこの人は何だかんだ言われても将来は茅場晶彦に負けず劣らずの天才として名を馳せる事になるのだ。
　それにしても明日奈と言いノブさんと言い俺の身内ちょっと優秀すぎないだろうか？　ノブさんは良く知らないが明日奈に関して言えば前回の時よりも遥かにどの面で見ても優秀である。それに比べて俺は一度高校生を経験している割にそうでもない。二人を見習ってもう少し努力した方が良さそうだ。
「やっぱり勉強できるんですねぇ。俺なんか未だにＢ判定なんですよ」
『君は受験までまだ一年以上あるじゃないか。そんなに慌てるような時期じゃないさ』
　ノブさんは笑いながら言っているが、残念ながら笑い事ではないのだ。東都工業大学に入学できなければ俺が茅場晶彦とコンタクトを取れるチャンスを失う事になるわけだし。

……ゲームをやっている場合じゃないのは俺の方じゃないか？
ノブさんは俺が心配するまでもなく受験を乗り越えそうだしなぁ。
『そういえば』
何かを思い出した様な口調でノブさんが声を発した。
『親父から聞いたんだけど、君は医療関係にも興味があるんだって？』
「あー…その話ですか」
正直に話しても良いものなのかと一瞬思ったが、ノブさん相手なら問題ないだろう。
「別に、今から医者になりたいとかじゃないんですけどね。テレビとかネットとかでよく不治の病って言われるような病気があるじゃないですか。そういうものの治療法の発見とかに関わっていけたら良いなーなんて思ったわけですよ。だから父さんに最新の医療機器を取り扱う会社の見学とかをしてみたいって頼んでみたんです」
『それで、彰三さんは何て？』
「お前がもう少し立派になったら考えておくって言われました」
『そうなるだろうね。医療機器なんて最新技術の塊だし、部外者が簡単に関われる分野じゃない。だけどまぁ、立派な志を持つ事自体は一向に構わないと思うけど。それを実行できる能力があるのかどうかが問題だ』
「はは、仰る通りで」
俺がどうして医療関係にも興味があるなんて事になっているかと言えば、前回の俺の人生でのワンシーンに由来する。
何歳の時だったか、正確な年齢までは流石に覚えていないが明日奈が友人の葬式に参加するという事があった。当時の明日奈はまだ学生だったし、そんなに若くして亡くなるなんて事はあり得ない、とまでは言わないが確率は低いだろう。不幸にも事故か病気になってしまったのだろうと見当をつけ、聞いてみると友人の死因はＨＩＶ感染によってＡＩＤＳを発症してしまった事による病死だったとの事。
俺は当然だがその亡くなった明日奈の友人との接点などなかった。しかし明日奈が相当落ち込んでいる様子を見て、俺も何となく意気消沈したものだった。

だから今回はその友人の病気を完治させるとまではいかなくても、病状を和らげてあげられたらなんて思い立ったわけである。せっかく前回の人生経験とそれなりの知識があるのだ。助けられる命ならば助けてあげたいと思う。

『……ふむ』

ノブさんは何かを考えているようだ。少しの間、俺達から会話がなくなる。二人とも黙って群がってくるゾンビを倒し続ける。カチャカチャとコントローラーを操作する音だけがヘッドフォン越しに微かに聞こえてくる。

『なぁ浩一郎君』

どれぐらい時間が経っただろうか。周囲のゾンビを殲滅して一息吐けるという状況になった時、ノブさんが俺が予想していた斜め上の発言をする。

『骨髄バンクって知っているかい？』

「……はぁ」

完全に分野外の単語に関する知識を脳内で検索をかけてみることした。

△△△△

「骨髄バンクって知っているかい？」

ヘッドフォンの向こうから、はぁ、と何とも言い難い返事とも言えないようなものが聞こえる。少し唐突過ぎたかと思うが、幸いにも通話中の彼は優秀な頭脳を持っているのでこちらの言いたい事はそれなりに伝わるだろう。

「僕はとある医師とコネクションを持っていてね。将来、ＶＲ技術の発展に携わっていきたい身だからその医師と意見交換したりしてい

るんだ。それである程度だけど医療に関する話も彼から聞かされている」
『そうなんですか。流石ですねぇ』
　返ってきた言葉はそんな軽い適当な感じのものだった。普通、まだ高校生の自分が医者という社会的身分の高い人物と繋がりがあると言われたらそれなりに驚くと思うのだが、この程度では彼の心を動かすには足りなかったらしい。最も、その医者との繋がりも親の力に寄る部分が大きいから自慢にもならないのは間違いないと須郷は自嘲した。
　須郷は自分の能力については親の力でも何でもなく自らの努力によるものであると自負しているが、周囲の人間はそのようには見てくれない。須郷家の一人息子ならば当然の出来だと言わんばかりなのだ。それは実の両親であっても例外ではなく、勉学でどんなに優れた結果を叩きつけようとも労いの言葉などかけられた事もなかった。そんな家庭環境に置かれていた須郷はかなり擦れてしまっていた。学校では周囲の人間を下に見る事も少なくなかったのでまともな交友関係など築けるはずもなく。その孤独が須郷の性格をより歪めていった。
　そんな須郷にとって結城浩一郎という一つ年下の男と交流を持つようになったのは幸運だった。勝手に決められた婚約の挨拶を兼ねたパーティーがあったあの日。あの出会いが須郷を変えたと言ってもいい。
「その医師の先生が言っていた。骨髄のドナーの数が圧倒的に不足していると。助かるはずの患者がそのせいで助からないと。まぁある種の愚痴の様なものを聞かされたわけだが……浩一郎君の話を聞いて思い出した」
『それでその骨髄のドナー登録がどうしたんです？　まさか俺が登録しろとでも？』
「ああ、その通りだ」
　え、とヘッドフォンの向こう側から間抜けな声が聞こえた。須郷は久しぶりに義兄ーー須郷としては弟と思っているーーの虚を突けた

と笑う。
『で、でも俺まだ十六ですよ。あのドナー登録が出来るようになるのって十八歳からじゃなかったでしたっけ。それに』
「そうだね。しかも実際に骨髄を患者に提供できるようになるのは成人してからだ」
『ですよね？』
　案外詳しい。須郷は改めて浩一郎の知識の豊富さに感心した。医療に興味があると言っていたから少しは調べたようだが、それならば話が早くて助かる。
「だから先に僕がドナー登録をしようというわけさ」
『……ノブさんの話って分かりづらいって言われませんか？』
「おや、伝わらなかったかい？」
『はぁ。ノブさんが先にドナー登録者になる事でさっき言っていた医者とのパイプをより太くする。それに俺が父さん達を説得する時の材料の一つになってくれるわけですよね』
「その通り。ドナーの提供には提供者の家族からすれば抵抗がある場合が少なくないからね。僕が人柱になろうというわけ。はは、ちゃんと分かってくれているじゃないか。」
　再び溜め息が聞こえてきたが須郷は笑って無視した。やはり浩一郎は優秀だ。将来は是非とも自分と同じ道に進んで部下として支えてもらいたいと密かに思っている。
「それに知っていると思うがドナーが患者に適合するケースは少ない。実際に提供する事などほぼ無いだろう……おっと」
　パソコンの画面には新しいミッションが表示され再びゾンビが群がってくる。須郷はキャラクターの装備をショットガンから剣へと変更した。
『今度は俺が』
「頼む」
　装備を変更したのに合わせて浩一郎も装備を変更していた。先程まで振るっていたナイフから見るからに重量がありそうな二丁拳銃へと。それを見て須郷は再び笑う。ゲームと言えど、本当に他人の様

子を伺うのが上手い奴だと。こういう人間が味方だと非常に心強い。
『ノブさん？』
「いいや、何でもない。話を戻そう」
　須郷が操る白いローブを着たキャラクターがゾンビ達に突撃する。それに合わせて浩一郎の操る灰色を基調としたスーツに身を包んだキャラが発砲した。ゾンビがバタバタと倒れて消滅していく。須郷はこの爽快感が好きだった。
「僕の紹介という事にしておけば浩一郎君もその医者とのコネクションを構築できるだろう。医療分野に興味があるという事も話しておいてあげるから、後は君次第だ」
『マジですか？』
「大マジさ」
『……そこまでしてもらうのも何か申し訳ないっすね』
「余計なお世話だったかい？」
『いやいやそんな事はないです。お願いして良いですか？』
　浩一郎があっさり承諾した事に少しだけ驚いた。如何にこの何を考えているのか読めない男だとしても少しくらい悩むと思っていた。
『俺の方からそれとなく父さんに話しておきますね。こうすればノブさんのお父さんも説得しやすくなるでしょ』
　こちらから頼もうと思っていた事を先に提案されてしまった。本当に頭の良く働く奴だ。
「彰三さんから親父に言ってくれれば話も通りやすいだろう。済まないね浩一郎君」
『いえいえこれぐらいはお安い御用ですって。むしろ力を貸してもらっているのは俺の方ですし』
　通話なので浩一郎の顔は見えないが彼は今笑っているだろう。あの人懐っこい笑顔を浮かべているのだろう。あの笑顔は役に立つ。何を考えているのか読めないという意味でも、警戒心を持たせづらいという面でも交渉等で役立つであろう笑顔を持っているのが須郷の義兄だった。
　その話はここで終わり、須郷はゲームの方へと意識を戻した。しば

らくゾンビ相手に無双する時間が続いた。
『あ、そうだ。あのニュース見ました？』
浩一郎が話題を投げてきたので意識を耳に傾ける。
『茅場晶彦が新しいタイプのゲーム開発に着手してるってニュース』
茅場晶彦。
コントローラーを握る手に力が入る。ミシリとコントローラーが音を立てた。
『いやー凄いですよね。あの若さでもう新しいジャンルのゲームを作ろうって言うんだから。あの人って確かノブさんより二つくらい年上なんですよね？』
「……そうだね」
須郷が専門とする分野、その頂点に絶対的強者として君臨しているのが茅場晶彦という天才だった。高校時代からその才能を見せつけ、大学に入りアーガスの開発部門に配属されてからはそれを更に開花させていた。
須郷がどれほど勉強し、研究に励んでも奴はそれの更に上を行く。今回のニュースでの発表は須郷の中の黒い感情を高めるのには充分すぎた。
『ＶＲ技術を転用したゲームのキラータイトル的な存在になるらしいですね。発表はまだまだ先になるそうですけど』
楽しみだなー、なんて言いながらゲームの中で弾丸をばら撒いている浩一郎とは対照的に須郷は恐怖していた。そのゲームの完成度によってはまた自分は茅場に差をつけられてしまうと。
「……いつか僕だってあいつを越えるような発表をしてやるさ」
それは酷く暗く、静かな声だった。
須郷は常に茅場晶彦と自身を比較していた。同じ分野、同じ才のある者として比べずにはいられなかった。いつか超えてやると、いつかお前をその高みから引きずり降ろしてやると。須郷は暗い感情を腹の中に抱えていた。
その為なら使えるものは何だって使う。それが親のコネであろうと、勝手に決められた許嫁であろうと。現在唯一、友と呼べるこの男

であろうと。使えるものは何だってーー
『んーノブさんが茅場晶彦を越えるのは無理じゃないっすかねぇ』
須郷の思考が停止した。丁度ゲームのミッションも終わり準備画面に戻った。
「……それは、どういう意味かな」
こみ上げてくる激情を必死に抑えながら努めていつも通りの調子で問う。答えによっては如何に浩一郎であろうとも許すわけにはいかない。
問われた浩一郎は須郷の変化に気づいていないのか至って普通に答える。
『そのまんまの意味です。今、この世界に茅場晶彦を越えるような人間は存在しない。そもそもあんな変態宇宙人みたいな頭脳を持った奴に勝とうって思う方が無理です。仮にそんな奴がいたらそれは人間じゃない』
変態宇宙人とは……それは褒めているのだろうか？　それにしても彼は茅場晶彦を随分と買っているようだ。何となく、気に入らない。
「如何に茅場が雲の上の存在だとしても、僕は奴を越えると言う野望（ゆめ）を捨てられない。これは僕が成さなければならない事だ」
こんな醜い感情であっても須郷の信念だった。執念と言っても良いかもしれない。茅場晶彦を越える、というのは須郷の最終目標なのだ。
『もう嫌だな。そんな怖い声出す前に話を最後まで聞いてください』
思わず息を？んだ。通話越しで表情が見えないというのに須郷の心の動きは読まれていた。驚く須郷を他所に浩一郎は言う。
『茅場晶彦を越えるなんて言うのは簡単ですけど正直厳しいです。ノブさんは確かに天才だと思いますけど、茅場は更にその一段階上です。本当はノブさんだって分かってるはず』
ーー分かっているーー
須郷は全身に力が入るのを感じた。自身が茅場に劣っているのは誰よりも自分が分かっている。

それでも、この分野で、同じ土俵で、好きな研究で奴に劣るなど須郷のプライドが許せなかったのだ。
須郷は何かを反論しようと口を開こうとした。
「ッ、それでも僕は」
『ノブさん』
耳に響くその声は静かだった。須郷のものとは違い、静かで聞く者を落ち着かせるような……そんな声。
『ノブさん一人じゃ茅場晶彦に届かないかもしれない。でも、二人だったら届く』
今度こそ須郷は驚かされた。
『ノブさんは天才です。それについては胸を張って良いと思います。だけど一人じゃ勝てない相手がいるのもまた当然。だって、俺達は人間でしょう？』
男は言っているのだ。一人で背負う事はないと。
『だったら俺が手伝いますよ。俺達はその為に力を合わせるって事ができるんじゃないですか』
声は笑っている。如何にも楽しそうに。これからの冒険が楽しみで仕方がない主人公の様に。
「……そうだな」
小さく静かに須郷は肯定した。その声は先程の様に暗くは無い。
「折角のお誘いだ。僕の魔王退治の冒険のパーティーに加わってもらう事にしよう」
『俺って準備はしっかりするタイプなんですよ』
「奇遇だな。僕もだよ」
茅場にはしばらくの間、君臨していてもらおう。今はまだ時期ではない。いきなり魔王城に乗り込んでも惨めに敗北するという結果は見えている。
今はこの頼りになる将来の相棒とレベル上げだ。力量も装備も整えて奴に挑戦状を叩きつけてやろう。
「さ、もう一回程やって今日はおしまいにしようか。準備は良いかい？」

『まだやるんすか……良いっすけど』
親に勝手に決められた婚約だが感謝しなければなるまい。この男との出会いは間違いなく須郷の生き方を変えたのだから。これからはもう少し許嫁ともコミュニケーションを取って仲良くしていかなければ。結城家という家単位で仲を深めていこうと決めた。心底愉快そうに須郷の口元が歪んだ。
――逃がすものかーー
『ん、何か言いました？』
「いいや？　それよりもそろそろ僕の事を義兄さんと呼んでも良いんじゃないかって思うんだが」
『寝言は寝てからでお願いしますね。ノブさんは正確に言えば俺の義弟になるんですしそもそもアンタに明日奈はやらん』
手厳しいな、と須郷は苦笑する。このシスコン具合は浩一郎の数少ない欠点だが、一つくらい欠点があった方が可愛げもあるというものだろう。須郷はそう思うようにした。
パソコン画面にミッションが表示されゲームが始まる。彼といると本当に退屈せずに済みそうだ。再び口元を歪めて、須郷は意識をゲームの方へと集中させた。

田舎は田舎で良いものだと思う。

二年目の高校生活も四か月程経って夏休みに突入。前回の人生で既に社会に出て働くという経験をしている俺から言わせてもらえば、こんなに長期の休みが黙っていても与えられるというのはかなり幸せな事だと言える。多くの学生はその事に気付くことなく怠惰な毎日を送っているがそれも無理の無い事だ。当たり前の事として享受しているものの有難さなど分かるはずもないのだから。

そんな難しい話は一旦何処かに置いておいて。今日から世間はお盆と呼ばれる時期に入る。今日から数日の間は学生のみならず大半の大人も仕事をせずに疲れ切った心身を休める期間をもらえるのだ。帰省して実家の墓参りに行く者、友人や家族と旅行に行く者。お盆における休暇の過ごし方は様々だろう。

俺の家はどうかと言えば、実家に帰省してのんびりと過ごすのが毎年の恒例行事となっていた。母方の実家は田舎という表現がぴったりと当てはまる、宮城の良く言えばのどかな、悪く言えば寂れた農村にある。前回の時は何もなくて退屈な場所ぐらいにしか思わず、正直あまり好きではなかった。そんな俺とは反対に明日奈は祖父母の家が気に入っていたようで二人が亡くなるまで毎年欠かさず訪れていた。

確かに父方の実家である京都に行ってもする事と言えば親戚一同やらお偉いさんへの挨拶回りに追われるだけなので、そういった面倒な事が無いと考えると宮城の実家も悪くない。ついでに言えばじいちゃん達が作っている農作物を使ったばあちゃんの料理が美味いのは俺的にポイントが高い。ばあちゃんお手製の野菜の漬物は絶品なのだ。

ーーーー

というわけでやって参りました宮城の実家。新幹線やら電車やらバスを乗り継ぐこと数時間、ようやくたどり着いた場所で待っていたのは白色の軽自動車に乗ったじいちゃんだった。
「二人だけでよく来たなぁ」
じいちゃんは俺達を車に乗せてからそう笑った。
今回の宮城入りは俺と明日奈の二人だけ。父方の遠い親戚の訃報が届き、父さん達はこちらに来ることが出来なくなってしまい、明日奈を一人で行かせるわけにはいかないという事で俺もこちらに同行することになった。母さんも最初は明日奈が宮城の実家に行く事を渋っていたが、「浩一郎がちゃんと面倒を見てくれるのなら」という条件で許してくれた。
「じいちゃん、元気だった？」
「おう。今のところはな」
今のところはーーその通りだ。じいちゃんもばあちゃんもまだ元気だが、数年後にはーーそこまで考えて俺は軽く首を振った。こればかりは俺がどうこうして変えられる、いや、変えて良い問題ではない。
俺と明日奈を乗せて走る事、十分。じいちゃん達の家に着いた。着くと同時に明日奈は車から飛び出すと「おばあちゃーん！」と家の中に駆け込んでいってしまった。それを見たじいちゃんは、
「明日奈はおばあちゃんが大好きだもんなぁ」
如何にも悲しいといった口調だったが、それでも嬉しそうに笑っている。普段会えない可愛い孫に会えて嬉しくない者などいないと思う。特に明日奈は女の子だし、年齢的にも可愛い盛りだから。
俺が家に上がるとばあちゃんが出迎えてくれた。毎年変わらず笑顔で俺を迎えてくれる。俺は客間に入って部屋の真ん中に置かれたテーブルの前に腰を下ろした。
「遠くからよく来たね。何もないけどゆっくりしてね」
この言葉も毎年変わらない。そう言いながら俺に冷たい麦茶を出してくれるのだ。それを飲むと暑さで参っていた身体が少しだけ冷

たくなるのを感じる。
「ばあちゃん、元気だった？」
「今のところはねぇ。だけど何時まで元気でいられるかどうか」
「ずっと元気じゃなきゃダメ！」
　明日奈の抗議にばあちゃんだけでなく、隣にいたじいちゃんも笑った。「二人が遊びに来てくれるうちは元気でいなくちゃね」とばあちゃんは明日奈の頭を撫でた。去年は俺の膝の上に座っていた明日奈だが、今年からばあちゃんの膝の上が定位置になったようだ。別に悲しくなんてないからな本当だぞ。
　この家で俺がしなくてはならない事などない。両親から小言を言われる事もない。夏休みの課題もとっくに終わらせている。本当にのんびりと何もせずに過ごす。俺は部屋にあった二人掛けのソファに腰かけ、持って来た荷物から一冊の本を取り出した。
　それは先日、ノブさんが家に遊びに来た時に俺に手渡してくれたものだった。『プログラミングのキソのキソ～これで貴方も天才プログラマー～』と表紙に大きく書かれたその本はこれからの俺のやりたい事を助けてくれるお助けアイテムである。しかし基礎の基礎と銘打っているのに天才になれるとは如何なものなのだろうか。
「お兄ちゃん、こっちに来てまで何の本を読んでいるの？」
　本を眺めていた俺の横に座った明日奈は呆れた様子だった。
「ちょっと学校とは違う勉強をしようと思ってノブさんから借りたんだ」
「うぇ、また須郷さん」
「……そこまで嫌なのかよ。全く」
　許嫁の男の名前を聞いて露骨に嫌そうな顔をした。どうしてそこまで嫌ってるのか分からない。本人の前では猫被ろうとしているだけ最初よりマシになったのだが、ノブさんがいない場所ではこの通りである。
「だってあの人が来るとお兄ちゃん構ってくれないんだもん。二人でずっとお喋りしながらゲームばっかりしてさ」
「仕方がないだろ。俺とノブさんの話なんて難しくて明日奈が聞いて

もつまらないだろうし」
　最近になって、ノブさんが我が家に遊びに来てくれた時に俺に対して勉強を教えてくれている。受験勉強から専門的なプログラミングの事まで。少しナルシストっぽい所が欠点と言えば欠点だけど、やっぱりあの人は間違いなく天才だ。教え方も非常に上手いし俺としては非常に助かっている。
「……私だってもう少し大きくなったらお兄ちゃんや須郷さんに負けないんだから」
　不貞腐れる明日奈の頭を少しだけ強め力で撫で回してやった。最近になってやたらと背伸びしたがるが、こういった時はまだまだ子供だなと思う。実際まだ子供なんだけどさ、小二だし。不機嫌そうにしていてもこうやって撫でてやれば、あら不思議。あっという間に気持ちよさそうに目を細めてくれます。ウチの妹、猫みたいだな……
　最近、明日奈をなでなでしていなかったので久しぶりのこの感じを堪能していると、生温かい視線に気がついた。
「ふふ、明日奈ちゃんは相変わらずお兄ちゃんが大好きなのねぇ」
「なっ」
「俺達ほど仲良しな兄妹はそういないよ」
「ちがっ、違うからねおばあちゃん。これは、その、お兄ちゃんが無理矢理」
　その言い方は盛大に誤解を招きそうだから止めなさい。通報されたらどうするんだ。ばあちゃんに必死に説明しようとしている明日奈を俺は微笑ましく思った。恥ずかしいのか、余りに必死な様子なので仕方なくなでなでから解放してやると、素早く俺の元を離れていった。そしてばあちゃんと、少し離れた所で新聞を広げていたじいちゃん相手に説明し始める。二人は、何もかも分かっていますよ、と言わんばかりの笑顔でうんうんと頷いていた。
　俺はそんな光景をソファに座って見ていた。前回の時では考えられない穏やかな時間が流れている。こんな気持ちで、明日奈と祖父母の会話を眺める事になるなんて。
「お兄ちゃんもいつまでもニヤニヤしないで」

おっと、自分でも気づかないうちに頬が緩んでいたようだ。そんな俺が気に入らないのか、明日奈は再び不機嫌そうにこちらを見ている。所謂、ジト目という奴だ。軽い謝罪を入れて、俺は再び手に持っていた本に視線を戻す。

俺の表情が変わった事を認めた明日奈はじいちゃんの手元にあった新聞を覗き込んでいた。何かあの子の興味を惹く記事でも書いてあれば良いんだが。あの子の年齢的にまだ新聞は早い気がしたが、新聞を読み、世間の情勢を知るのは良い事なので何も口を出さない。明日奈はハイスペックだしな、新聞くらいもう既に読めるのかもしれない。

俺は明日奈の面倒をじいちゃんに任せ、夕食の時間までのんびり勉強でもしていようと読書に集中する事にした。

△△△△

「そろそろ晩ご飯でも作ろうかね」

よっこいしょ、と立ち上がったおばあちゃんを見て私は新聞から顔を上げた。最近、家族の真似をして読み始めた新聞。大人はどうしてこんな読みづらいものを読んでいるのか、今の私にはまだ理解しきれていない。ただ難しい漢字を覚えるという意味では役に立っていると思う。逆に言えばその程度の役にしか立っていないのだけど。私には新聞に書かれている『しゃかいじょーせー』というものがイマイチ理解しきれないのだ。

おばあちゃんが台所に入っていたのを見届け、私は椅子に座って本を読んでいるお兄ちゃんへと目を向けた。読んでいる本は少し前に私の（甚だ遺憾ではあるけれど）婚約者である須郷さんから渡されていたものらしい。私は須郷さんの事がどうしても好きになれないのだが、お兄ちゃんは彼と良好な関係を築いているようだった。まるで私と須郷さんの仲を取り持つように。

お兄ちゃんは成績優秀、容姿端麗、普段は物静かだし、加えて人懐っこい性格をしているので親戚からの評価も上々、文字通り完璧な長男として結城家の期待を一身に集めている。でもお父さん達はゲームに熱中し過ぎている事に少し頭を抱えているみたい。ゲームくらい好きにさせてあげたらいいのに。

ゲーム好きの延長なのか、最近は自分でゲームを創り上げる事に興味を持ち始めたらしく、学校や受験の勉強と並行してゲーム制作の知識も学んでいるらしい。だからお兄ちゃんと須郷さんとの会話の内容は私には少し難しい。専門用語ばかりが飛び交う会話でも二人は非常に楽しいようで、よく盛り上がっている。ちなみにあの瞬間は私は疎外感に苛まれるので面白くない。率直に言ってしまえば、お兄ちゃんと須郷さんが楽しそうに話をしているのが気に食わない。

そんな私にも分かる事と言えば、どうやらお兄ちゃん外国の神話をベースとした新たなゲームを創り出したいという事だ。てっきり私は昔よく聞かせてくれていた、『鋼鉄の城での剣士達の冒険』のゲームを創ろうとしていると思ったのだが、違った。

何でも、須郷さん曰く、「実際に空を飛ぶ感覚を味わう事のできるVRゲーム」らしい。そのゲームの世界観はお兄ちゃんの物語ではなく、世界の神話とか物語をベースとしたものにするらしい。お兄ちゃんの物語が大好きな私としては少しだけショックだった。普段はゲームという娯楽にさほど興味がない私でも、是非ともやってみたいと思えるくらいにはその物語が好きだった。

私はその物語に登場する『閃光』と呼ばれる女の子に憧れた。

心身共に強く、決して退かず戦い続け、冒険の最後には真っ黒な英雄と結ばれる彼女に私は憧れたのだ。そしてその様になりたいと心から思った。

そういった意味でも私は兄という人間に憧れているのかもしれない。勿論、『閃光』と性別は違うけど。お兄ちゃんは何でもできるし、いつも私達家族や他人の事を思いやって行動してくれている。どんな事も決して投げ出そうとしない。それは心身共に強く、決して逃げないと言えるのではないか。須郷さんと私の関係を懸命に繋ぎ止め

ようとしているのがその最たる例だろう。
おかげで私は最初の頃よりは須郷さんが苦手ではなくなった。いや、最初の頃よりも須郷さんの雰囲気が変わった気がするのだ。何というか、柔らかくなったって言うのかな。未だにお兄さんを独り占めしようとするのは気に食わないけれどね。
いつか私にも好きな人ができたりするのかな？　親が決めた婚約者がいても、私にはまだ他人を好きになるっていうのは良く分からない。前はお兄ちゃんと結婚したいって思ってたけど、お父さんに「兄妹で結婚はできない」って言われちゃったし……別に悲しくなんてないから。ほんとよ？
「？　どうした明日奈。そんな難しい顔をして」
そんな事を考えていたからか、お兄ちゃんが不意に本から顔を上げた時に目が合ってしまった。
「べ、別に何でもないよ！」
咄嗟にそう答えると、そうか？　と言って再び視線を本に戻してしまった。こういう時に、もう少しだけ構ってくれてもいいのに、と思う私はまだまだ子供なんだろうな。
でも今日くらいは良いよね。邪魔者（須郷さん）もいないし、少しくらいはお兄ちゃんを一人占めしたっていいはず。
この後、ご飯を食べて沢山お喋りして、おばあちゃんと一緒にお風呂に入ってのんびりしよう。
ああ、そうだ。久しぶりにお兄ちゃんと一緒に寝たいなぁ。最近、どうしてかは分からないけどお兄ちゃんからは誘ってくれなくなった。もしかして、私と一緒に寝るのが嫌なのかな……？
その事を聞こうと思ったらおばあちゃんに、ご飯が出来たから机に並べて欲しいって言われた。言われた通りに並べて、四人でご飯を食べ始めた。
「ばあちゃんの飯は良いな。なんて言うか、落ち着く」
お味噌汁を飲みながらお兄ちゃんがそう言った。私もそれには同意見だった。
「そうかい？　そう言ってもらえたら作った甲斐もあるってものだ

ねぇ」
「明日奈も、美味しいかい？」
おじいちゃんに聞かれて、私は頷く。
「うん。すっごく美味しいよ。ほんと、あったかい」
「ふふ、それは良かったわ……そうだ、明日奈ちゃんのお布団はお兄ちゃんと一緒でいいのかしら」
私が答えるよりも早く「え」と声を出したのは勿論、お兄ちゃん。
「いや、流石にそろそろ別にーー」
「一緒で良いよ」
「え？」
「なに？　問題でもあるの？」
「問題と言うかな、明日奈。お兄ちゃんとしては嬉しいんだが」
「だったら良いじゃない。それともお兄ちゃん、本当は私と一緒になるのが嫌なの？」
「……明日奈が良いんだったら良いんだけどさ」
と、言う事で無事にお兄ちゃんと一緒に寝る権利を得た。おじいちゃんに「明日奈は将来、男を尻に敷いてそうだな」と言って笑われたのが気になったけど。どういう意味なんだろう？
そうだ！　今日はいつもより少しだけ夜更かししちゃおうかな。せっかく一緒に寝るんだし、沢山お話したいし。こういう時は、えっと何て言うんだっけ？
お父さんの書斎にあった本の……そうそう、確か。
「お兄ちゃん！」
「ん、どうした？」
「えっと、今夜は寝かせないから！」
言った瞬間、おじいちゃんとお兄さんがほとんど同時に、ぶっ！と噴き出した。おばあちゃんも驚いているようで目を大きく開けていた。けど、おじいちゃんとおばあちゃんはすぐに笑いだして、お兄ちゃんは困ったように額に手を当てていた……あれ、何か間違ったかな？
皆の反応の意味が分からなかったので、私は首を傾げるだけだっ

た。

魔王の嫁とエンカウントした時の対処法

季節は巡り、春。俺は高校三年生になっていよいよ大学受験まで一年もなくなった。勉強も更に気合を入れている。

また学校生活では何故か去年の夏休み明けにあった生徒会の選挙で生徒会長に担ぎ上げられ見事当選してしまった。先生方、いくらなんでも生徒指導部のゴリラ＋体育教師のゴリラ＋柔道部の顧問のゴリラの三頭で囲むのはやりすぎですよ。あの状況で「生徒会長になれ」って言われて断れる人間はいないでしょうよ。

ちなみに俺は前回の時もこの高校の生徒会長だった。これも運命か……生徒会長なんて面倒なだけだからやりたくなかったのに。勿論、選ばれたからにはそれなりの結果は出していきたいとは思っている。

俺が通っている高校は『生徒の自主性を重んじる』とか言う立派なお題目を掲げているので生徒会の権限が強く、学校で起こった問題は生徒会が率先して解決していくのだ。学校祭の運営というどこの学校にもありそうな当たり前のものから生徒同士の恋のお悩み相談教室まで……もうウチの生徒会って学校の便利屋みたいな扱いになってるよな。報酬を求めても良いレベルの労働だよ、あれは。

そんな事を考えながら、俺は目の前のインターフォンを押した。すぐさま家主であるノブさんが笑顔で出迎えてくれた。

「よく来たね。さぁさぁ上がって」

「お邪魔します」

ここはノブさんが以前まで住んでいた実家ではなく、新たに借りたというマンションの一室だ。通っている東都工業大学に近いこの場所で一人暮らしをしている。

俺は初めて訪れた彼の新居の中身をぐるっと見回して、

「一人で暮らすには広すぎませんか？」

「狭いよりは広い方が良いだろう？　それにここにも研究として使う機材を入れるつもりなんだ」

これでも狭かったかもしれない、なんて苦笑するノブさん。

一人暮らしで無駄に広いなんて掃除などの管理が大変なだけではないかと思ったが、ちゃんとした理由があったらしい。
「親父が斡旋してくれた中から僕が選んだんだ。良い部屋だろう？
とりあえず座ってもらおうかな」
促されて一目で高級だと分かる椅子に座る。ノブさんはこういった高級なインテリアを好む。俺達の互いの実家ではこのような家具は珍しくないので大して気にならないが、普通の学生なら驚くだろうな。少なくともこの椅子もテーブルも一人暮らしのマンションに置かれるようなものでは無いのだから。
「……ま、俺以外にこの家に来る奴なんていないから関係ないか」
「いきなり酷い言い草だね？　ま、事実だけどさ」
割と失礼な事を言ったにも関わらず、ノブさんは笑いながら俺にコーヒー出してくれた。俺はそれに口を付けず、質問した。
「それで、何の用です？　チャットや通話じゃなくて直接会って話したいなんて。余程の話があるんじゃないですか？」
「新しい家を君に見せびらかしたかった、では駄目かな？」
「駄目です。茶化さないでください」
「相変わらず厳しいな浩一郎君は。もう少しくらいお喋りしてくれても……とりあえず、最初にこれを見てくれるかな」
ぶつぶつと文句の様なものを言いながらノブさんが俺に手渡してきたのはクリアファイル。その間にはそれなりの量のプリントが挟まれていた。ノブさんが真剣な表情に変わった事からそれなりの内容のものであるのだと俺に予感させた。
中身を取り出し、目を通していく。
「……これは」
「まだ原案以下のもの、らしいけどね。僕が所属している研究室の先輩が考案したものだ」
そのプリントに書かれていたのはまだこの時代では実現していない医療器具――コードネーム、メディキュボイドの構想案だった。
羅列されている文字やグラフに目を通しながら思わず呟いてしまった。凄い、と。

ノブさんに教えてもらいながらフルダイブ技術について学んでいる今だからこそ何となくではあるが理解できる。これを考えた人物は天才だ。
原案以下のもの、という事でまだ様々な問題が残っているようだが、それを差し引いてもこの理論に辿り着ける研究者が世界に何人いるだろうか？
「コンセプトはレンズを組み合わせる事によってＶＲ世界と現実環境を同期させて『拡張現実（ＡＲ）』を実現させる……か。これが実用化されるとなれば医療環境がガラリと変わりそうですね」
「実現には開発予算、電磁パルスの出力の弱さといった問題が山積みなんだけど、仮に実現すればほとんどの手術で麻酔が不要になるらしい。精神に問題がある患者とも脳に直接働きかける事によってコミュニケーションが取れるようになるとか」
それは凄い。凄いとは思うのだが……
「どうして俺にこんなものを？　これって外に出しちゃ不味い資料なんじゃないですか？」
「これを考えた人に『僕の後輩に医療関係のＶＲ技術に興味がある面白い奴がいる』と言ったら喜々として渡してくれたよ。良かったら君の意見を聞かせてほしいとも言っていたな」
「うーん……」
意見と言われてもなぁ。このレベルになると今の俺では技術的な意見を出す事はほとんどできない。プリントにまとめられている内容も何となくでしか理解できない。自分でも分かってはいたがまだまだ勉強不足のようだ。
「その先輩はＶＲゲームの開発よりも医療（こちら）分野の方に力を入れている人でね。うちの研究室には茅場先輩を筆頭にゲームにしか関心のない人間ばかりだから、自分と話ができる奴が欲しいらしい」
なるほど。確かに研究の分野が同じ人間が身近にいないと議論を深める事もしづらいか。俺は名前も知らないその先輩に少しだけ同情した。
それにしても分かってはいた事とは言え、ノブさんは凄い場所で研

究しているんだな。茅場だけでなく、他の学生もこのレベルの知識を持っているとなると……ノブさんの研究室では理解不能な単語が飛び交う摩訶不思議な空間が広がっているに違いない。
「……俺、大学に入学できたとしてもやっていけますかね」
「浩一郎君なら大丈夫だろう」
「その根拠は？」
「君には僕がついているからさ」
はい、本日一のノブさんのドヤ顔いただきました。言っておくがそんなものは根拠とは言わない。それはノブさんの勘だと思うのだが、本人は本心からそう信じているようだ。
言い換えればそこまで信頼してもらっているという事だろうから、ノブさんとの仲を深めて将来、明日奈を拉致監禁するという暴挙を防ぐ目的は達成できそうである。まだ油断はできないが、そこは素直に喜んで良いと思う。
「ああ、そうそう。大事な事を言い忘れる所だった。来週の土曜日って空いているかい？」
来週の土曜日？　その日は確か午前中は学校で講習があるが、午後は暇だったはずだ。
「このレポートの製作者である彼女――神代凛子先輩が君に会いたいそうだ」
「え」
どうして俺に会いたいのか？　その理由を尋ねる前にノブさんが爆弾を投下した。
「ちなみにだけど彼女は君がリスペクトしている茅場先輩の恋人だよ」
「ふぁっ!?」

――――

いきなりラスボスの恋人とエンカウントするとは流石に予想外だった。しかしこれは願ってもなかったチャンスである。
もしも神代凛子に気に入ってもらう事ができたのなら、彼女を介して茅場晶彦とコンタクトを取る事ができるようになるかもしれないからだ。ここでのミスは俺の計画において致命的なものになりかねない。俺は気を引き締めて事前に準備をしていた。
そして約束の日になり、俺は東都工業大学を訪れた。そしてノブさん立ち合いの元、神代さんと会った。
ちなみに彼女はなかなかの美人さんだった。茅場晶彦は天才的な頭脳だけではなく、恋愛面においても勝ち組のようだ。リア充は爆ぜろ。
まあ別に悔しくなんてないし？　前回の人生ではちゃんと結婚できた（しかし親が決めた許嫁である）し、今回だって恋人はいなくても代わりに天使の様な妹がいるからな！
……自分で考えていて虚しくなってきたのでこの話は止めよう。考えている事がバレたのか、途中ノブさんがいやらしくニヤニヤしていたのでとりあえず殴っておいた。殴られてもノブさんは笑っていた。マゾか。そうなんだな？　もう一発いっとくか？
「貴方、面白い人ね」
それを見ていた神代さんも笑っていた。初対面で「面白い」と言われても反応に困る。なので早々に本題に入る事にした。俺は愛想笑いを浮かべて言葉を返した。
「先輩こそ面白い人ですよね。レポート見させてもらいましたけど」
意図的に場の空気を切り替える。自身の雰囲気を変えると言うべきだろうか。威圧し過ぎず、舐められ過ぎず。前回の人生で務めていた会社の幹部として何度も重要な会議を切り抜けてきた俺である。この程度の腹芸はお手の物だ。
俺は持って来ていた鞄から一つのファイルを取り出して、彼女に差し出す。
「貴女のレポートを参考にして俺なりの解釈をまとめてみました……

率直に言って感服しました。これが実現すれば助からないと言われている重病人の患者も救う事ができるようになるでしょうね」
「これを貴方が？」
　ファイルにまとめられている資料に目を通しながら、神代さんが尋ねてきた。
「まだまだ空想の域を出ないものですけど」
「いいえ、充分よ。むしろ充分すぎるくらい」
　真剣に目を通している様子を見て、内心でホッとする。もう既に遥か彼方に存在するメディキュボイドの記憶を徹夜で手繰り寄せた甲斐があった。メディキュボイド関連の製品を営業で売った時の知識がこんな所で生きるとは思いもよらなかったが結果オーライという奴だ。
「確かに貴方の言う通り、この技術が実現すれば多くの病気で苦しむ人達を救う事ができるようになる……でもその為には研究もまだまだだし、何より資金が圧倒的に不足している」
　神代さんはファイルを目の前の机に置いてから大きく息を吐いた。確かに資金の問題はどんな研究にもついて回る問題だ。如何に彼女が優秀であると言ってもまだ大学生。研究を支援してくれるスポンサーなど中々見つかるものではないのだろう。
　俺の今回の目的は彼女の目に留まる事……つまり、俺が役に立つ人間であると思わせる事である。
　神代さんが進めているメディキュボイドの問題点は大きく二つ。一つは当然、資金面での援助。もう一つは臨床試験による実際の現場から採れるデータだ。医療分野には命に関わるリスクが付きまとうので試験によって得られるデータというものが重要視される。
　この二つがない現時点では神代さんの頭脳とコンピュータ上の計算、言ってしまえば机上の空論でしかない。
「金銭面では茅場さんに頼ってみては？　彼には学生とは思えないほどの莫大なお金があると思うんですが」
「茅場君には頼れないわ」
　神代さんはあっさりと言った。

「彼には彼のやるべき研究がある。お金だって無限にあるわけじゃない。限られた資源を余計な事に回す余裕なんてないわ」
これは予想通りの回答だ。茅場を頼りにできるのならば、彼女の研究はもっと進んでいるはずなのだから。
俺は如何にも悩んでいます、という感じで腕を組んで考え込む姿勢をとり、彼女の言葉を待った。
しばらく誰も喋らなかったが、不意に神代さんが悩ましげに、
「資金面だけじゃなくて、実際のデータも足りないわ。まだまだＶＲ技術を応用した治療に対する医師の理解も進んでいないのよ」
――やっと来たか。
俺はその言葉を待っていたのだ。
「医師の理解……それなら何とかなるかもしれません」
「どういう事かしら？」
神代さんは怪訝そうに俺を見た。その目には「何言ってんだコイツ」という色が宿っている。自分よりも年下の高校生に解決できる問題ではないだろうと思っているのだろう。実際、医師という存在とは無縁なのが普通の人間だ。
しかし俺は残念ながら普通の人間には当てはまらない。持つべきものは人脈の広い優秀な義弟である。ありがとうノブさん。
「実は最近、あるお医者さんとお話する機会がありまして。その人は医療分野よりも先にゲーム関連のＶＲ技術が発展していくのを嘆いていました。もしも医療関係に応用されて現場に導入されたら助かる命が増えるのに、と」
「まさか、その医者を私に紹介してくれるというの？」
「はい。実はもう軽く話は通してあります。お二人が予定を合わせられたらすぐにでもお話できる状態です」
その時、スッと神代さんの目が細められた。こちらの腹を探ろうとしているのだろう。俺はなるべく表情を変えないように努めた。
「……どういった見返りを求めているのかしら」
「見返り？」
「分かっていると思うけれど貴方の行動に対する報酬として渡せるも

のは持ち合わせていないわ」
　彼女の問いに、俺は即答した。
「別に見返りなんていらないですよ？」
「え？」
　神代さんは驚きで目を大きく開いた。後ろでは一言も発していないノブさんが小さく笑っている。全く……人が真面目にやっているというのにニヤニヤするのは止めて頂けませんかね？　こっちは表情を作るのにも精神を使っているというのに気楽な人だ。
「ちょ、ちょっと待って」
「ああ、強いて言うとすれば僕に知識を授けてほしいですね。ゲーム関連の知識はノブさん……じゃない。須郷さんが教えてくれるんですけど、医療関連だったら神代さんの方が専門でしょうし」
「こちらからすればその程度で協力してもらえるというなら願ってもない話だけれど……本当にいいのかしら」
　実際のところ、俺からすれば理解が深そうな医者を紹介するだけなのだ。そこから先は神代さん次第だからな。俺は黙って頷いた。
　しかし神代さん程の優秀な人と俺が紹介しようという医者――倉橋先生のコンビならば何かを成し遂げてくれそうな気がする。
　倉橋先生とは二、三度会って話をしただけだが、それだけで彼が医療現場の現状を嘆いている事とそれを何とかしたいと思っている熱い心を持っている事が分かった。
　あれだけ熱心な人だ。きっかけさえあれば行動を起こしてくれる。このままメディキュボイドの研究が国家事業にでもなれば最高なのだが、流石にいきなりそこまではいくまい。まだまだ俺の計画も課題が山積みである。
　思わずため息を吐きたくなったが、そこで目の前に座っている神代さんがニコニコしている事に気がついた。一瞬、呆気に取られてしまったがすぐに気を取り直して、
「えっと、何か？」
「いいえ、ただ本当に面白い人だと思って……ふふ」
「そうなんです。浩一郎君といると退屈しないんですよ」

「他人に心を開かない貴方が気に入る理由がよく分かったわ。須郷君」
「心外ですね。僕だって飲みに行く友人位いますよ」
「その友人って茅場君の事でしょう。というか貴方まだ未成年じゃなかったっけ？」
「おっと、これは口が滑ったかな」
二人は楽しそうに笑い合っているが、俺は見事に取り残されている。てかノブさんや、さっきまで黙って見ていたくせに何を楽しそうに美女と談笑しているんですかね？　明日奈という可愛い許嫁がいるというのに浮気は許しませんよ！　明日奈はアンタには渡すつもりはないけれどそれはそれである。
「ノブさん、大学生になったからってはしゃぎ過ぎはいけないですよ。とりあえず神代さん……これを」
舞い上がっているノブさんには馬の耳に念仏だろうが一応窘めてから、事前に許可をもらっておいた倉橋先生の電話番号を神代さんに渡した。彼女はそれを受け取ると満足そうに微笑んでポケットに仕舞った。
「結城君はこの大学を志望しているんだったわね。もしも入学できたらウチの研究室にいらっしゃい。貴方の様な優秀な人材なら大歓迎だわ」
「優秀って……僕はそんな大層なものじゃないですよ。ただ必死になってるだけですから」
「謙遜ね。まあ、いいわ。待ってるわよ。報酬もその時に、ね？」
「神代先輩はこう見えて厳しいんだ。覚悟しておくんだね」
「ははは……お手柔らかにお願いします」
俺は差し出された手を握り返した。肩の荷が一つ降りた気分だった。一先ずの目的は果たせたし、神代さんに好印象を与える事ができただろう。
――しかしこの時、彼女が浮かべていた微笑みに何処か底知れないものを感じてしまったのは気のせいだと思いたいところである。

△△△△

「――なるほど、それでか。君がこの二週間を忙しそうにしていたのは」
「ええ。あの子のおかげで研究がかなり進んだわ。倉橋氏との打ち合わせも順調。上手くいけば私の在学中に資金面の問題も解決できるかも」
「ほう……」
　私は思わず感嘆の声を出してしまった。彼女がーー神代凛子がここまで上機嫌なのは久しぶりだ。それほどまでに順調に研究が進んでいるのだろう。
「それにしてもこうして顔を合わせるのも久しぶりね」
　そう言って彼女は目の前に置かれていたワインを一口含んだ。全く、実に優雅に飲む奴だ。顔が良いせいでやたらと絵になる。
「互いに忙しい身だ。仕方がないだろう」
「そちらは順調なの？」
「ああ。概ね予定通りといったところか」
「それは何よりね。だったらもっと私との時間を作ってくれても良いんじゃないかしら」
「思っても無い事を口にするのは止めたまえ。その程度で愛想を尽かすような女ならば私と関係を持っていないだろう」
「違いないわ」
　言ってもう一口、ワインを口に運んだ。先程も言ったが互いに忙しい身なのだ。世間一般で言う恋人同士がする行為をする時間すらも惜しい。
「それにしても彼……結城浩一郎君。本当に面白い子よ」
「……ほう」

私が食事の手を止める程度には興味が引かれた。彼女が面白いと評する男はあの須郷君に続いて二人目だ。ちなみに彼は中々にイカれているので私も気に入っている唯一の後輩である。
「須郷君もよくその名前を口にするな……彼や君が面白いと評する。その理由を聞いてもいいかね」
「……瞳」
少し間を空けて彼女はそう言った。
「私が考えている医療器具の原案を完璧に近づけたあの知識も魅力的だけど、私が面白いと思ったのは彼の瞳がね、貴方に似ていたからよ」
私に似ている、か。首を振って一蹴する。
「過大評価、だな。私に及ぶ者などいるはずもない」
「その謎の自信は何処から来ているのかしらね。いいけれど、貴方も一度会ってみれば分かるわ」
「時間の無駄だろう」
「そう言わないで。来年、一緒に研究をする仲間になるかもしれないんだから。その時に嫌でも顔を合わせるわよ」
時間の無駄だと言っておきながら私は気になっていた。二人がそこまで拘る結城浩一郎とはどの様な男なのか。他人に関心の薄い、私からすれば珍しい事だ。
そして私は心の何処かで思っていた。私に似ている瞳をしているという男に出会えるのを楽しみにしている事を。私は久しぶりに口元が緩むのを自覚した。
「……悪い顔ね」
「なに、生まれつきさ」
そう小さく笑うと、グラスに注がれていたワインを一気に飲み干した。

あの子の夢はナイト様？

俺が倉橋先生に神代さんを紹介して以降、研究が凄いペースで進んでいるらしい。先日、先生に会った時に喜々とした様子でそう語ってくれた。俺には医療の専門用語だらけであまり理解できなかったが、少しは役に立ったようで何よりである。

何かもうね、骨髄バンクに登録するとかそういうのどうでも良くなる位に倉橋先生に気に入られている件。それどころか、医者を目指してみないかと誘われるまでだ。俺には医者を目指す理由も何もないので丁重にお断りしたが。医者ってそんな簡単にホイホイなれるような職業じゃないから俺に対する社交辞令の様なものだったのかもしれない。

「ただいまー」

玄関の方から明日奈の声がして、俺は出迎える為に立ち上がった。今日の様な平日に明日奈が俺より遅くに帰って来るというのは珍しい。

「おかえり。今日は遅かったな？」

「うん、色々あって遅くなっちゃったの」

「何があったんだ？」

可愛い妹が何だか元気がない様子だ。これは兄として元気づけてあげなければなるまい。

「俺には言えないような悩みか？」

「そうじゃないんだけど……ちょっと待ってて」

明日奈は自分の部屋に向かった。荷物を置き、部屋着に着替える為だろう。言われた通りに待っていると、少ししてから明日奈は戻ってきた。

「ちゃんと手は洗ってきたか？」

「勿論洗ってきたよ。だけどお兄ちゃん、私もう子供じゃないんだからそんな事言われなくても分かってるよ」

ぷぅ、と不満気に頬を膨らませる様子は非常に可愛らしい。俺の隣

に腰を下ろした彼女の頭を撫でて機嫌を取ろうとする。すると、すぐに表情を崩した。可愛いが我が妹ながら単純すぎて将来が心配になるな。
「それで、何があったんだ？」
「あ、うん。私、クラスの男の子に告白されたの」
コクハク？　コクハクってあれか。気になる人に好意を伝えるって意味の告白か？
そうかそうか、明日奈はこんなにも可愛いもんな。いくら小学生でも他人を好きになったりするもんな。こんなに可愛い明日奈を好きになる男子が出てきても不思議じゃないよな。ウチの妹は天使だもんな。
「お兄ちゃん？」
明日奈は怪訝そうに俺を見上げている。いかんいかん、動揺し過ぎて少し何処かへトリップしてしまっていたようだ。
如何に子供同士の恋愛とはいえ、こういう時は兄としてどっしりと構えていなければいけないと思い、背筋を伸ばして尋ねる。
「そうか。それで、なんて返事したんだ？」
「ごめんなさいって言ったよ。その子の事は嫌いじゃなかったけど好きでもなかったし」
玉砕ッ！　名も知らぬ少年は犠牲になったのだ……ウチの妹はどうやらと言うかやはりと言うか、難攻不落のようである。
「それでね、実は告白されたの、その子で四人目なの」
やだ、俺の妹ってばモテまくり？　小学生の恋愛事情はよく分からないが、四人に告白されるとなるとかなりものだろう。小学生なので興味半分という事もあるだろうが、それを踏まえても異性から人気があるのは兄として喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか微妙な所だ。
だが他人から人気がある、というのは悪い事ではないと思う。嫉妬を買ってしまう事もあるかもしれないが、明日奈の様子を見るにクラスでそんな事は今のところないみたいだしな。
「良かったじゃないか」
「え？」

「普通、小学生のうちにそんなに告白なんて中々されないもんだよ」
「お兄ちゃんもそうだったの？　告白とかされた？」
「俺はそういうのとは無縁だったなぁ」
　自分の小学校時代を思い返す。前回の記憶を思い出すまでは友達も少なく、休み時間は図書室で読書か教室で自習ばかりしていたからな。クラスの女の子達から人気など出るはずもなかった。正しく黒歴史ですね本当にありがとうございました。
「へー、そうなんだ。ふーん」
　俺の黒歴史を聞いた妹は何故か嬉しそうにニコニコしている。そんなに俺がモテない事が嬉しいのか、解せぬ。
「まぁ、あれだ。お兄ちゃんは明日奈と違ってモテないからな。アドバイスとかはしてあげられないかもなぁ」
　小学生の妹よりもモテない高校生の兄がいるらしい。まあ言わずもがな俺の事だけどな。何という自虐ネタ。
　自嘲気味に声を出して笑っていると、明日奈がジト目でこちらを睨んでいる事に気付いた。
「でもお兄ちゃんだってこの前のバレンタインの時にチョコレート一杯もらってきてたじゃない」
「ああ、あれは義理だよ義理」
「ギリ？」
「友達にあげるチョコレートって意味さ」
　言っていて少しだけ悲しくなったのは明日奈には内緒だ。
　今は生徒会長という学校で目立つポジションにいるので、去年までと違ってかなりの数のチョコをもらう事ができた。前回の人生を含めてもあれだけの数のチョコをもらった事はなかったので素直に嬉しかったなぁ。
　思い出してニヤニヤしそうになるのを必死で堪えていると、
「……じゃあ手紙が付いてたチョコレートは何だったの？」
　やだ、この子ったらどうしてその事を知っているのかしら。誰にも言っていないし見られた記憶もないんだけど。
　しかも明日奈の目が怖い。いつも通り可愛らしい笑顔のはずなの

に目だけが笑ってないので不気味なまである。なんだこの浮気が発覚して妻に問い詰められているかのような空気は。俺と明日奈は兄妹なんだからそんな空気が発生するはずもないのだが、その表現が一番ふさわしいと思う。

タイトル、ウチの妹がこんなにも怖可愛いわけがない。駄目だ、絶対に売れないよこんな語呂の悪いタイトルのラノベ。

「お兄ちゃん？　私には言えない事なの？」

分かった。答えるからその目が笑っていない笑顔は止めてくれ。俺の心臓に良くないから。

「こんな俺の事を好きだって言ってくれた子がいたんだよ。この何もかも電子化されている時代にわざわざ手紙でね」

「それでそれで？」

「もちろんお断りしたよ」

「どうして？」

「どうしてって言われると難しいな」

恋愛に対する価値感覚など個人差があって当たり前のものだし、もちろん絶対的な答えなどないものだ。

故に俺はこう答えた。

「明日奈と一緒さ」

その子の事が嫌いだったわけではない。しかし顔も知らない相手からの告白など普通は断るだろう。性欲が野獣と呼ばれてもおかしくない男子高校生の言葉とは思われないかもしれないが、生憎と俺の人生は二週目だ。大抵のそういう事は経験済みであるし、今更好きでもない女性とそのような関係になる気など全くなかったのだから仕方ない。

「明日奈もこれから色々な事を経験するだろうけどな、変な男には引っかかるんじゃないぞ？　ノブさんがいるとはいえ「須郷さんは嫌」……そうか」

ふい、とそっぽを向いたまま言い放った。

二人だけで話をしている事も増えてきたし、少しは仲良くなったと思ったんだけどな。まだまだ二人の溝は埋まりそうにないっぽい。

「世の中には変な男も一杯いるから明日奈がそういう連中に誑かされないかお兄ちゃんは心配だよ」
明日奈は賢くて可愛いけど変な所で単純、もといチョロいからな。
少し茶化すような口調でそう言うと、明日奈は何故か胸を張って自信満々といった感じで言った。
「大丈夫だよ。だって私はお兄ちゃんと結婚するもん。そんな心配いらないよ」
「え」
まじか？　いやいや嬉しいよ？　嬉しいけどね？　流石に明日奈の今の年齢になってまで兄と結婚したいと思っているのは不味くないか？
どうしてこうなった。俺はどこの光源氏だよ。現代日本でやろうもんなら俺が死ぬ。勿論社会の目といった意味で。
「……もう、冗談よ。流石にもう分かってるもん。兄妹じゃ結婚はできないって」
じょ、冗談か。良かったような悲しいような……全く、お兄ちゃん心は複雑だなあ。そこら辺の乙女よりは複雑だという自信はある。何という無駄な自信だと自嘲してみたり……うん、本当に無駄だから考えるのを止めよう。
まぁ嫌われてるよりは良いか……良いよね？
「しかし、明日奈も恋やら愛やら悩むようになったのか」
「悩むというかそもそも他人を好きになるっていうのがよく分からないの。そういう気持ちってお兄ちゃんを好きっていう気持ちとは違うんでしょ？」
明日奈が言っているのは家族愛の事だ。明日奈が分からない、知りたい感情とは全く別物だろう。
そんなもの知りたいと思って知れるものでもない。そのうち勝手に知っていくだろう。その感情を知った時には明日奈は俺から離れて行ってしまうかもしれないが……まぁ、その時はその時だ。
俺は明日奈の頭の上に手を乗せたまま、こう言ってやった。
「きっともう少し大きくなったら分かるさ。俺達家族とは違う、別の

意味で他人を好きになるって事が」

△△△△

休日のある日、明日奈は須郷が暮らしているマンションに来ていた。

両親は仕事、兄は学校で講習、お手伝いさんも今日は用事があるとの事でお休み。家には明日奈以外誰もいないという状態をよろしくないと考えての処置だった。ちなみに発案者は父の彰三である。

最初は須郷と二人きりなど断固拒否の姿勢を崩さなかった明日奈だが、兄に諭され折れる事になったのだ。夕方になる前には兄が迎えに来てくれると言ったのでそれまでの我慢だと自身に言い聞かせながらこの場にいる。

適当にくつろいでくれ、と言われたので一応、遠慮しながらも部屋の中を見回してみる。難しそうな本や高そうな機械が沢山ある、明日奈に言わせれば全く面白みのない部屋だ。

須郷本人もパソコンで何か作業をしている。手元にある紙の束とパソコンの画面を交互に見比べたりしていて忙しそうだ。

――暇だ。

明日奈は暇だった。別に勉強をしたい気分でもないし、習い事の自主練をしようにも此処には道具などない。

何をして時間を潰そうか、と思考しながら本棚を眺めていたら、ふと一冊の本が明日奈の目に留まる。

『夏の夜の夢』

そのタイトルの本を何となく手に取り、パラパラとめくりながら目を通す。その登場人物の名前の一つが何故か気になった。

「ティターニア……」

「ティターニアがどうかしたのかい？」
　いつの間にか須郷が作業を止めて明日奈の近くにやって来ていた。須郷の接近に気付かなかった明日奈は驚いて一歩下がった。
「ううん、特に。ただ何となく気になっただけで」
「夏の夜の夢なんて読んでいるのか。だけどこれは少し明日奈君には早いんじゃないかな」
「む、そんな事ないです」
　子供扱いされた明日奈は抗議の視線を送る。それを受けた須郷は苦笑して明日奈にティターニアについて語り始めた。
「ティターニアは妖精の女王でね。夫であるオベロンと同等の強大な力を持っているんだ」
「へー、妖精の女王様なのに全然可愛くないんですね」
「こういった小説の挿絵だから明日奈君からすれば可愛くないだろうね。ただ作中では美しい存在として描かれているんだ」
　それから須郷が丁寧に『夏の夜の夢』という作品について説明してくれたおかげで、どのような作品なのか大体理解できた明日奈だったが、一つだけ気になる事があった。
「オベロンとティターニアは夫婦なんですよね。だったらどうして喧嘩なんてしちゃったんですか？」
「それは先程も説明した通りーー」
「二人が子供を取り合って喧嘩しちゃった事は分かりました。そうじゃなくて、好きな人同士だったら最初から喧嘩なんてしないべきだと思うんです」
　明日奈からすれば、結婚までしているのだからそんなくだらない事で喧嘩などするべきではないと思ったのだ。真面目に聞いた明日奈だったが、須郷は声を出して笑い始めた。
「……ふふふ。そうかそうか、賢い君でも分からない事はあるんだね。何だか安心したよ」
　そんな言い方をされれば自然と腹が立つ。特に気に入らない相手から言われたのだから尚更だ。
「もういいです。須郷さんに聞いた私が馬鹿でした」

「ああ、ごめんごめん。僕が悪かったから怒らないでくれ。せっかくの可愛い顔が台無しだ」
「そういうの良いですから」
「……一割でも良いから浩一郎君に対する優しさを分けてもらいたいな」
　それは無理な相談である。大好きな兄と須郷では比べるまでもない。そもそも明日奈は未だに須郷が苦手なのだ。何故苦手なのかは明日奈自身にもよく分かっていないが。
　理不尽極まりない扱いの須郷が再び苦笑しながら手に持っていた『夏の夜の夢』の本を棚に戻す。
「さっきの質問だけどね。夫婦という関係だからこそ、くだらない理由で喧嘩をしたのだと僕は思うよ」
　その言葉の意味が分からず明日奈は首を傾げた。須郷は諭すように優しく言う。
「夫婦というのは最初から家族じゃない。血の繋がりという分かりやすい絆も存在しない、赤の他人が結婚して家族になるのが夫婦なんだ。互いを良く理解し、信頼し合っているからこそ夫婦として上手く機能するんだ」
　勿論例外も沢山あるだろうけどね、と須郷は笑った。
「くだらない事で喧嘩ができる、その後しっかりと仲直りができる。僕は素晴らしい関係だと思うよ」
　須郷さんがまともっぽい事を言っている、と明日奈は驚きで目を真ん丸にした。
「何か失礼な事を考えていないかい？」
　気のせいです、と明日奈は目を逸らした。
　須郷がまともな恋愛の価値観を持っている事に驚いた明日奈だったが、それで以前の兄との会話で気になっていた事があったのを思い出した。
「須郷さん、人を好きになるって何ですか？　前にお兄ちゃんに聞いたんですけど、結局分からなくて」
「これまた答え辛い質問だな……ちなみに浩一郎君は何て言っていた

？」
「私がもう少し大人になったら分かるって。家族とは違った意味で人を好きになる事だって言ってました」
「なるほどね。それは浩一郎君らしい答えだ」
　それは一体どういう意味なのだろうか。一人納得している様子の須郷は特に説明もせず、僕なりの答えで申し訳ないが、と前置きしてから質問に返答した。
「その人が自分にとっての特別だと感じればそれはもう一種の恋なんじゃないかな」
「特別……？」
「ああ。誰よりも一緒にいたい。自分の隣で笑っていて欲しい。楽しい事も辛い事も共有したい。そんな想いを他人に抱くようになったらそれは恋だと呼んでも良いだろうし、突然理由も分からないまま説明もできないのにどうしようもなく他人を好きになってしまう事だってある」
「須郷さんもそういう経験があるんですか？」
「生憎と僕には可愛い許嫁が既にいるからね。知識として知っているというだけでそういった経験は「そういうの良いですから」……兄妹揃って辛辣な事だよ、全く」
　須郷さんが思ってもいない事ばかり言うからでしょう、と明日奈は呆れていた。対照的に須郷は楽しそうに言葉を続ける。
「さっきも言ったけれど人を好きになるというのは人それぞれの価値観があるから一概にこれ、という答えはない。明日奈君はこれからゆっくりと自分の答えを見つけていけば良いと僕は思うよ」
　不意に頭の上に優しく乗せられた手に、思わず大好きな兄の姿を重ねそうになるがそれはいけない事だと須郷の手を払い除けた。
　払い除けられた手を見つめながら須郷は本日何度目か分からない苦笑を浮かべた。
「まあ、とにかくだ。明日奈君が可愛いというのは本当だし、もう少し大人になったら君の事を守ってくれる王子様でも現れてくれるさ」
　王子様。

お姫様の危機に颯爽と駆けつけ、どんな時でも味方になってくれて命を懸けて守ってくれる。そんな素晴らしい存在だ。
その単語の意味する所を思い浮かべ、少しだけ考えてから明日奈はきっぱりとした様子で言い放った。
「嫌です」
「え？」
今度は須郷が驚きで目を大きく開く番だった。
「どうしてだい？　王子様っていうのは女の子からすれば一度は憧れるものじゃないかと思うんだけどな」
「私は嫌なんです。お姫様になんてなりたくない」
可愛くて、か弱くて、守られているだけのお姫様。そんなものに明日奈は憧れない。
「私は王子様を守ってあげたい。守られるだけじゃ嫌なんです。私は大切な人を守って、支えて、助けてあげられる様になりたい」
「……君は大した女の子だよ」
あと何年か早く生まれてくれていたらなぁ、と須郷は困ったように言った。
「それじゃあ、これからもっと頑張らないとね。大切な人達を守ってあげられる様に。そんな素晴らしい心を持った大人になる為に」
再び明日奈の頭の上に須郷の手が乗せられる。今度は、払い除けたりしなかった。明日奈はそっぽを向いたまま小さい声で、
「……仕方がないから、ついでに須郷さんも私が守ってあげます」
「これは頼もしいお姫様……いや、ナイト様かな？　僕も将来の旦那として恥ずかしくないように頑張っていくよ」
「ほんと、そういうの良いですから」
彼女がデレたのは一瞬だけであった。兄妹揃って本当に手厳しいと須郷は落胆した。
「ちなみに僕は誰のついでに守ってもらえるのかな？」
「勿論、お兄ちゃんです。兄妹で結婚はできないけど、ずっと一緒にいるくらいはできますよね？」
えへん、と胸を張って即答した明日奈に、浩一郎と明日奈は取り返

しのつかない所まで来てしまっているのではないかと須郷は割とガチで思った。

無知を恥じず、未知を恐れず

結果から言って、俺は東都工業大学に合格した。担任から聞いた話によれば、ウチの高校から現役で東都工業大学に合格したのは歴代で三人目らしい。ここ何年も現役合格は出ていなかったと熱く語っていたので余程、自身の受け持っていた生徒が難関校に合格した事が誇らしかったのだろう。父もそんな俺を褒めてくれたし、母も珍しく喜んでくれていた。

しばらくの間、俺の合格の為に勉強を教えてくれたノブさんや神代さんには頭が上がりそうにない。自分達の研究で忙しいだろうに進んで俺の勉強を見てくれていた。二人に合格の報告をした時には凄く喜んでくれた。

『是非ウチの研究室へ』

二人はそう言ってくれたし、俺としてもそれはありがたい話ではあるのだがそんな事可能なのだろうか？　俺はまだまだ知識不足であるし、何より二人の所属している研究室……重村ゼミは東都工業大学でもハイレベルな人間が集まる場所であり、それに比例して人気も高い。毎年の募集人員に対して応募人数は異常な程に多く、この研究室目当てでこの大学を目指す人間もいるくらいなのだ。

そんな所に俺の様な人間が入ってもいいのか、その疑問にノブさんは呆れた様子で答えた。

「他の有象無象などどうでもいい。僕には君が必要だし、逆もまた然り。そうだろう？」

確かに俺の目的の為には手段を選んでなどいられない。そんな事は分かっているがノブさんの他人を見下すような言い方はどうにも気に食わなかった。

しかし俺の目的、茅場晶彦に近づく為にこれ以上の手段が思いつかない俺はその提案を断る事などできなかった。俺は渋々と頷いたのだった。

それからは入学式、講義のオリエンテーション等々あったが特別な事はなかったので割愛する。これらを終えた感想はと言えば、思った

よりも自由に講義を取れないんだなぁ、ぐらいだった。
閑話休題。
研究室に所属できるようになるのは後期からだったのでしばらくは退屈だろう。普通の大学生らしく過ごすのだ。今まで勉強尽くしで脳が疲れていたから丁度良い休憩になるだろう。
……そんな風に考えていた時期が俺にもありました。
「どうだい、浩一郎君。我が研究室は」
「……は、はは。良いんですかね。俺なんかがこんな場所にいても」
「今の時間は講義も特別な用事もなかったんだろう？　なら、何の問題もないよ」
まさか入学して一か月弱で目的の研究室に連れ込まれるとは予想していなかった。ついでに言わせてもらうと、ここはアンタの研究室じゃないでしょうに。
「須郷君、ここは貴方の研究室じゃないでしょう？　そんな言い方をしていたらまた重村教授が怒るわよ」
ノブさんを窘めているのは当然だが神代さん。この人も俺をこの場所に連れ込んだ元凶の一人であるから、彼女の素敵な微笑みでは誤魔化されてはいけない。
研究室を見回すと、よく分からない機材やら本やらが山積みされている。研究室にいる学生達はそれらを使って理解不能なディスカッションを行っている。
――この研究室は率直に言って魔窟だった。
現在、俺の笑顔が引き攣ってしまっているのも無理はないだろう。いきなりラスボスの御膝元と言っても良い場所に連れてこられてしまったのだから。
学生諸君（魔王の手下）、幹部（ノブさん＋神代さん＋重村教授）、そしてここにはいないが言わずもがなラスボスである魔王、茅場晶彦。全部含めて怪物だった。率直に言って貴方達、頭良すぎです。凡人の俺にはとてもついていけません。
「……なーんて、弱音吐いてる場合じゃないよな」
せっかくショートカットしてラスボスの城まで辿り着いたのだ。

弱腰になっている場合じゃない。ここまでは俺の計画通り、順調に進んでいる事を喜ぶべきなのだ。
茅場に取り入る為に俺はこの魔窟で存在価値を示さなければならない。
無知は恥ではない。知ろうとしない事が恥なのだ。知らない事はこれから学んでいけばいいだけの話。
「これから忙しくなりますね。ここで学べる事は多そうだ」
「僕らの目的の為にも休んでいる暇はないって事さ」
「目的？　何の話？」
「男同士の内緒の話です。なぁ、浩一郎君？」
「男の子って分からないわ……」
ノブさんはいつも簡単に言ってくれるよな。俺は彼の言葉に短く、そうですね、と苦笑を返す事しかできなかった。

ーーーーー

入学してからしばらく経ち、高校生の時と比べて変化した生活リズムにかなり慣れてきた。そんな時に俺は倉橋先生に呼び出されて、彼が務めている横浜港北総合病院を訪れていた。
この病院は現在唯一、ウチの大学と共同でメディキュボイドの研究と実験が行われている場所でもある。
「あら、結城君。今日もお勉強？　若いのに熱心ね～」
「ええ、まあそんな所です。ここで学べることは多いですから」
「やぁ結城君。今日もご苦労様」
「こんにちは。先生もお疲れ様です」
「おい坊主！　この前の借りを返してやるからちょっと面貸せや！」
「おじさん、そんなに大声出してたらまた花札の時みたいに婦長さん

に怒られちゃいますよ」
「頑張れよ未来のブラックジャック！」
「その人の様になったら俺の未来は闇医者ですけどね」
　道行く看護師、医者、果ては患者までも俺に挨拶をしてくれる。勿論、俺も笑顔でそれに対応する。俺もそれなり、というか、最近はかなりの頻度でここに足を運んでいるので病院にいる人達とすっかり顔馴染みになっている。少なくない人数が俺の事を医者の卵だと思っているが、俺の将来は大企業のサラリーマン（予定）だ。生憎、俺には医者になれる程の頭脳はない。
「そんな事はないと思いますよ。浩一郎君なら立派な医師になれる。大事なのは知識ではなく気持ちですから。もっとも、難関と呼ばれる大学に現役合格してしまうのですから勉強の心配もいらないでしょう」
　私なんて医学部に合格するのに浪人生活を送ってしまいましたから、と言って優しく笑っているのが俺を呼び出した倉橋先生である。
　この人も俺に医学の道を勧めてくるが、彼の場合はＶＲ技術を用いた治療法に理解のある同業者が欲しい故のものだろう。俺にそんな気概も熱意もないというのに。自分の周りの事だけで精一杯の俺には向いていない職業であるのは確定的に明らか。
「そんなに俺を持ち上げても何も出せませんよ。そもそも、先生も神代さんも俺を何だと思っているんですか。ただのしがない大学生ですよ？」
「ただのしがない大学生があれほどに洗練されたメディキュボイドの理論設計はできないと思うんですけどね」
　それを持ち出してしまわれれば何も言い返せない。
　まさか馬鹿正直に「前回の人生で得た知識と記憶をフル活用しました」なんて言えるはずもなく。言った所で荒唐無稽な与太話だと一蹴されるだけだろうが。違う意味でこの病院のお世話になってしまうまである。俺は笑って誤魔化す事しかできなかった。
「それはそうとですね。今日は一体何の話でしょうか。メディキュボイドに関しての相談でしたら俺よりも神代さんに相談した方が早い

んじゃ？」
「そうなんですが、今回に関しては神代さんにお願いするよりも結城君の方が適任だと思ったんです」
　そう言って倉橋先生は姿勢を正した。神代さんではなく俺に対してのお願いという事は、知識や技術といった専門的なものではないと推測できた。
「メディキュボイドの臨床試験を実地していく上で、被験者となる本人やご家族からの許可も頂かないといけないのですが、それよりも大きな問題は試験期間中及び治療期間中の患者の生活の質の確保……ＱＯＬの確保が問題なのです」
　ＱＯＬ、とはｑｕａｌｉｔｙ　ｏｆ　ｌｉｆｅ　の略で簡単に言えば人がどれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、幸福を感じられているのか、という事を尺度として捉える概念である。
「ＶＲ技術は研究に携わっている私でも驚いてしまう様なスピードで進化しています。近い将来、現実と遜色ない仮想空間も完成するでしょう。しかしです。現在の仮想空間の完成度では治療を受けている患者が自分らしい生活を送る事は到底できない。こんな状態では臨床試験に協力してくださいとお願いする事もできないのが現状です」
　そうなのだ。まだ仮想空間は前回の俺が生きていた時代の様な完成度ではない。重力を始めとした現実の物理法則を再現できていないのだ。ノブさん達研究者の苦労話は聞いているだけでもこちらが参ってしまうくらいには大変そうである。
　実は俺も一度だけ仮想空間にダイブさせてもらった事があるのだが……あれは酷いものだった。とてもじゃないが人間が過ごして耐えられる様な環境ではない。ちなみに既に前回の人生でフルダイブ経験がある俺からすれば、最初の仮想空間というのはこういうものだったのか、という何の生産性もない謎の感動が生まれたわけだが。
「医療器具へのＶＲ技術の応用はまだまだですからね。今のメディキュボイドは使用している患者の意識を遮断し、意識だけしか抽出できませんし」

「以前までと比較すれば充分過ぎるほどに進化してはいるのです。ただ今のままでは麻酔等を用いた手術と大差ないと言いますか……薬品をそれほど使わない分、患者の負担は少なく済むのは間違いない。しかしもっと重症の患者の治療を想定したものがコードネーム、メディキュボイド……結城君と神代さんが考案したものにはまだまだ追いついていない」
「メディキュボイドの最終的なゴールは患者の治療ではなくて終末医療、ターミナルケアの充実。仮想空間が完成しない事にはどうしようもないですもんね」
「辛い治療で傷ついた患者の心のケアはカウンセラーだけでは足りないのです。特に幼い患者は好奇心の強い子も多く、話を聞くだけでは……」
　確かに言われてみたら患者が話をするだけで満足するとは思えない。如何にプロのカウンセラーだとしても話だけでは効果が薄そうだな、と素人なりに考えていた。
「そうです、結城君。そこで提案なのですが」
「提案、ですか？」
　なるほど、これが本題というわけか。随分遠回りしたように思えるが一体何の話なのだろうか？
「結城君、私が担当している患者さんのカウンセリングをやってみませんか？」
「……はい？」
　俺の聞き間違いだろうか。何故、俺が患者のカウンセリングをするという話になっているんだ？　俺は前回の時を含めてもカウンセリングをやった経験なんてないぞ？
　俺の困惑を読み取ったのか、倉橋先生は表情を柔らかくして言った。
「カウンセリング、と言うのは名目だけですよ。君にやって欲しいのは患者との他愛無い会話……雑談です。神代さんから聞いた話なのですが、君達が所属している研究室ではＶＲ、ＡＲ技術だけでなくメンタルヘルスケア用のＡＩプログラムの研究もしているそうですね」

実は俺まだその研究室には所属してないんです。神代さんが勝手に言っているだけです、とか言ったら話が進まなそうなのでいつも通り笑顔で誤魔化しておく。笑って言葉を濁しておけば意外とこの辺りは何とかなってしまうものだ。

「将来、メディキュボイドが完成した折には必ずメンタルヘルスプログラムが必要になる。神代さんもそう言っていましたし、その意見には私も同意です。患者の数よりもカウンセラーの数が足りなくなることが容易に想定できます。勿論、プログラムにばかり任せておいていい問題でないのは分かっていますが、実現できれば終末医療の発展に貢献できる存在であるとも考えています」

「それは理解できますけど……それと俺がカウンセリングをやる事と何の関係があるんですか？」

「何でも神代さんの後輩で名前は確か……須郷君、だったかな？　彼が少し前に来て話をしてくれまして。患者がメディキュボイドを使った状態で会話をしている時のデータを収集したいので協力して欲しいとお願いされたんです」

「……ちょっとその須郷先輩に確認を取りたいので電話してきても良いですか？」

「構いませんよ。改めて須郷君によろしくお願いします」

倉橋先生の許可を頂いたので一旦席を立つ。通話しても問題にならない場所に移動してから、俺に無断で話を進めていた事に文句を言う為に携帯電話を取り出した。

――閑話休題。（会話のドッジボール中）

電話を終えて倉橋先生のいる部屋へと戻って来た。

「すみません。お待たせしました」

ちなみに電話をかけた相手であるノブさんの第一声は『驚いただろう？』だった。何の反省もしていないようなので次に会う時にはお仕置きの一つでもくれてやらねばなるまい。

「しかし神代さんといい、須郷君といい、そして結城君もですが君達が所属している研究室には真面目で熱意のある有望な若者が沢山集まっているみたいですね」

笑顔でそう言ってくれる先生には悪いが、騙されている。神代さんはともかく、ノブさんに関しては真面目でも何でもない。熱意ではなく野心と言い換えた方がしっくりくる気がする。
「それで、どうでしょう。結城君にも自身の研究や用事もあるでしょうから無理をしない範囲で構いません。私達の研究を手伝ってもらえないでしょうか」
ふむ、と。自分の中で結論は既に出ているが少しだけ思考する。正直に言って、あまり自信がない。カウンセリングどころか俺は他人と話すのがそれほど得意ではないのだ。そういった意味で、この話は俺に向いているとは言えないだろう。
「カウンセリングとかメンタルヘルスプログラムだとか難しく言ってしまっていますが、言ってしまえば私の担当している患者さんの話し相手になって欲しいのです。その患者さんは少々特別な事情がありまして……私も医者の端くれとして特定の患者さんへの感情移入は褒められたものでないことは自覚しているのですが、少しでも彼女達の力になってあげたいと思っているんです」
少しだけ表情を暗くして先生はそう言った。まるで自分の無力を呪っている様な。そんな顔をしていた。
それを見て、俺は先生の提案に乗ることを決めた。
「分かりました」
「本当ですか！」
「はい。俺がお喋りする事で先生達の研究が進むと言うのでしたらいくらでも協力しますよ」
いつも通りの笑顔で俺は先生に応える。
時間が巻き戻ってから、些細な事で悩むようになってしまった気がする。下手に未来を知ってしまっているからだろうか。未知に挑む事を恐れてしまっている。悩んでいる時間など俺にはないというのに。
最悪の未来（SAO事件）を回避する為に、俺には立ち止まっている暇も、悩んでいる時間もないのだから。
「ありがとうございます……最近、その患者さんは辛い事が続いてい

まして。結城君との会話で少しでもリフレッシュできるといいのですが」
「先生、ちなみにどういった病気、もしくは怪我をされている方なんですか？」
それを知らない事には患者と会話などできないだろう。症状が重い場合は言葉や話題も慎重に選ばなければならないしな。最も、医学に関して全くの素人である俺にそんな重症の患者が割り当てられるとは思わないが、一応聞いておくことにしたのだ。
――そんな風に思っていた俺に、先生が告げたものは予想の斜め上どころではないもので。
「……実は、その患者さん達の病気は後天性免疫不全症候群、所謂ＡＩＤＳです」
正確にはまだ潜伏期間ですのでＨＩＶキャリアですね、と先生は補足したが、その病名を聞いた俺が絶句して間抜けにも口を大きく開けてしまったのも悪くないと思う。
ＡＩＤＳと言えば、前回の時に明日奈の友人の命を奪った病気である。その友人をどうにか出来たらいいな、とは考えてはいたがまさか俺がその病気と直接関わる事になるとは想像もしていなかった……今更ではあるが、いよいよ俺の巻き戻り人生に神様か何かの意図を感じてきたな、なんて思いながら俺は内心で頭を抱えた。

△△△△

少し前にボク達のお父さんとお母さんが死んだ。
いつかやってくる事だとは分かっていたけれど。まさかこんなにも突然に、しかも二人同時になんてあんまりじゃないだろうか。
家族全員が抱えていた爆弾が、二人の分がまとめて爆発してしまっ

た。それだけの話だ。突然過ぎて、学校で二人が倒れたと聞いたボクは呆然としてしまった。しばらくは泣くこともなかった。大好きなお父さんとお母さんがいなくなってしまったいうのに。

この爆弾を抱えて生まれてからこうして大事に育ててもらったはずなのに、いつの間にか随分と冷たい人間になってしまっていたみたいだ。

二人が死んで、残されたのはボクとねーちゃんのたった二人。お金は二人が遺してくれたものがそれなりにあるけれど、まだ九歳になったばかりのボク達に生活能力が足りない事は明らかだった。

親戚の大人達は同情しているフリをして、二人の遺産を狙って近づいて来た。勿論、ボクもねーちゃんもそれを良しとせず全て突っぱねたけれど。

今は親戚の一人がボクらが住んでいる家を譲れと言ってきている。何やら家を潰してコンビニにしたいらしい。『この家を取り上げられたらボクらは何処に住めばいいんですか』と言ったらそれきり煩くは言ってこなくなった。

施設に入れてもらおうにもこんな爆弾を抱えているボクとねーちゃんを受け入れてくれる場所なんてあるはずがない。親戚にも頼れる人など存在しない。

更に悪い事は続いた。学校を含めた周囲の人間にボク達がＨＩＶキャリアだと知られてしまったのだ。両親が二人共ほとんど同時に倒れて、そのまま死んでしまったのだ。そこから知られてしまうのも無理もない。

そこから辛い時間が続いた。友達だった人から心無い言葉をぶつけられ、それを以前は親切だった先生達は知らないフリをする。ボクはねーちゃんとお世話になっているお医者さんの倉橋先生と相談して学校に行くのをやめた。学校でもボク達の扱いに困り果てていたようだし潮時だった。

倉橋先生は周りの態度の急変に怒ってくれたけど、ボクは無理も無い事だと思った。誰だって自分が感染するのは怖いだろうし、どんな親だって他人の子供より自分の子供の方が大切に決まっている。そ

れが理解できたからボクはその人達を恨んだりはしなかった。
ひょっとしたら怒りよりも悲しさ、そして寂しさの方が大きかったからかもしれない。
もうボクと関わってくれるのはねーちゃんと、倉橋先生を含めた病院の親切な人達しかいない。死ぬ為に生まれてきたボクと家族以外の人が関わってくれる。力になってくれる。
それはとても嬉しい事だけど、とても寂しい事でもあった。
現在は定期的に病院に通い検査を受けて薬を貰って、家では通信で学校の授業を受け、ねーちゃんと協力して家事をこなしていく日々を送っている。
今はまだ、ねーちゃんが傍にいてくれている。だからこうして依然と同じく元気に振舞えている。だけど、もしねーちゃんがボクより先に逝ってしまったら？　ボクはこのままでいられるだろうか？　正直、あまり自信がなかった。
だから、二人が死んでしまったあの日から、ボクはいつも願っている。
――どうか、ねーちゃんより先にボクが死んでしまいますようにーー
最低過ぎる願いだとは理解している。残されるねーちゃんの気持ちなんて何一つ考えていない。余りにも最低な祈りだ。言ったらねーちゃんが本気で怒るし泣くだろうから絶対に言わないけどね。それでもボクは、ねーちゃんには一秒でも長く生きていて欲しいのだ。
変わらない、いつの間にか色褪せてしまった日々を過ごしていたある日。いつも通り検査と薬を貰いに病院に行った時。倉橋先生がボク達に実験に協力して欲しいと頼んできた。
何でも、新しい医療器具の開発の為にデータが欲しいとのこと。実験と言ってもしばらくの間、ボク達はその機械を使ってお喋りをしていればそれで良いらしい。そんなことで新しいものが作れるのかと不思議に思ったけど、先生がそう言うんだからそうなのだろう。
それぐらいの事なら出来そうだったので実験を受ける事にした。

これで少しでもお世話になっている倉橋先生達に恩返しできればと思ったし、何より久しぶりにいつもと違う人と話がしてみたいと思ったから。
　案内された部屋にはカプセルの様な機械が置かれていて、そこに横になって頭にヘルメットの様なものを被らされた。何でも意識だけを抽出して、仮想空間？　とかで会話した時の脳波のデータが欲しいと先生は言っていたけど、話が難しすぎて詳しい事は理解できなかった。ねーちゃんにこっそりと聞いたら同じく分かっていなかったみたいで少しだけ安心した。
　準備が完了して少しして先生から合図が出た。仮想空間というものがどんなものなのか、久し振りに少しだけドキドキするのが分かった。
　――気づいたら真っ暗な空間にボクはいた。
　立っているのかも浮いているのかも分からない。視覚もまるで目隠しされているかのようで役に立ちそうにない。
　ここが仮想空間というものなのだろうか？　不安になったボクはねーちゃんを呼んだ。少し離れた辺りから声が聞こえたのでとりあえずは安心した。どうやら音は聞こえるらしい。
　辺りを見回して何とか少しでも情報を得ようとしたボクの耳に知らない人の声が聞こえた。
『何度来ても酷い場所だ。早くノブさん達もっとマシなものにしてくれないかなぁ……』
　若そうな男の人の声だった。声の感じから落ち着きのある優しい男の人をイメージした。
『えっと、あの』
『ああ、待たせちゃったかな？　ごめんね、こんな場所に来てもらっちゃって』
　やっぱりこの人がボク達とお喋りしてくれる人なんだ。お父さんと倉橋先生以外の男の人とお喋りなんてしたことがないので少しだけ緊張したけど、ねーちゃんが挨拶したのが聞こえて我に返って、頑張っていつも通り明るい声で挨拶した。

『初めまして、紺野木綿季です！　今日はよろしくお願いします！』
『お、キミは元気一杯だね。やっぱり子供はこうでなくっちゃ。こちらこそ今日からしばらくの間、よろしくお願いします……なんて、固い挨拶はこの辺りにしておいて、そうだね。まずはキミ達の事を簡単に教えてもらえないかな』
『それは良いんだけどさ。ボク達、お兄さんの名前まだ聞いてないよ？』
　横からねーちゃんが、敬語を使いなさい、と言ってきたけどボクは敬語が苦手だし、無理に使おうとすると変になっちゃうから嫌なんだよね。でも確かに言われてみたら年上の人だろうし敬語使わないといけないよね……
『おっと、ごめんよ。俺とした事が少しだけ緊張しているみたいだ。それから別に敬語じゃなくてもいいからね。二人共、俺の事は友達だと思ってくれると嬉しいかな』
　ボクはこの時、この研究が少しでも誰かの役に立つものになればいいなって、そう思っていた。思い返せば生きる事に疲れていたと言えるのかもしれない。死ぬ為に生まれたボクが、生まれた意味なんてないんだと思っていたんだ。
『俺の名前は結城浩一郎』
　それは近い将来、ボクの親友になってくれる人のお兄さんで。
『これから一緒に色んなことを勉強していこうね』
　死ぬ為に生まれてきたなんて思っていたどうしようもないボクに、生まれてきた意味を教えてくれて、生きることの価値も与えてくれた人の名前だった。